

第3回滋賀の教育協議会議事録（全体会①）

1 開催日時・場所

平成18年11月13日（月）午後1時30分～午後2時15分

滋賀県庁本館2階 滋賀県議会第3委員会室（大津市京町四丁目1番1号）

2 出席委員（五十音順、敬称略）

板倉安正委員、尾賀康裕委員、奥田祐子委員、片岡昌史委員、栗林茂委員、小巻おさみ委員、清水慶子委員、住岡英毅委員（会長）、千原美重子委員（副会長）、中居和平委員、西村勝晴委員、眞壁清治委員、山田昇委員、山本重夫委員、山本真理子委員

3 傍聴者の人数 2名

4 会議の概要

- 会 長 今日は前回お会いしてから2月経っていますが、3回目ということであり、段々会を深めて行くにつれて核心に入っていきますから、なかなか大変ではあります。

この前のお別れする時に申しあげましたことは、第3回目から議論していく柱と言ったらいいでしょうか、基本理念と言いましょるか、そういうものを私と副会長と事務局で相談してある程度、形のあるものを作って、そしてその案を皆様に提示して議論していただくことを約束しておりました。

それから、もう一つは、議論の仕方ですが、これだけの人数を一度に議論するということはなかなか難しい点もありますので、小集団形式と全体とを柔軟に取り入れながら進めていこうと、従って、柱に沿った分科会形式も少し考えたいということを申し上げておりましたが、お手元の資料の1ですが、これが基本理念を形にしたもので、分科会の構成案も含めてお示しをさせていただいております。これは事務局から予め配布されておまして、既にお目通しいただいていると存じますけれども、改めてここで事務局から今後のスケジュールも含めまして、説明をしていただけましたらと思います。

- 事務局 資料の1の基本理念の立て方につきまして、まとめております。理念の案としまして、6つの項目を掲げております。基本的にはこれまでの1回、2回のお話ならびにそれまでの間でご意見をいただきました委員の申し出に基づきまして、組み立てをしたところでございます。

最初の「キャリア教育」につきましては、1回目、2回目にお話をいただいております。次の資料2と併せてご覧いただけたらと思います。資料

の2は、今の基本理念に対応するご発言の中身をピックアップしたところでございます。『キャリア教育の推進』では、3ページにわたりまして多くのご意見をいただいております。そうした中で、議論の視点として、3点掲げさせていただいております。

1つ目が自分の人生を歩む道を見据えながら生きることの必要性ということで、資料2で言いますと、⑧の大学を出た時に自分は何をしたいのかという話、⑩の将来を見据えて自分がどのような能力を付けていかなければならないのかというご発言。2つ目の目的意識という視点からは、⑬の自らしたいこと、⑰で自分で選択する、将来のビジョンということ、⑱でも出ていますが、これらがこの項目に該当してきます。3つ目は子ども達の目的、キャリアや職業意識に応じた必要な学力、教育システムということとまとめております。「目的・キャリア」については、㉑でやりたいことが見つけられる、㉒で子ども自身が能動的に動く、「教育システム」という言葉はここには出ておりませんが、ご意見としていただいております。あと、分かりやすい「コース」ということで、㉔に例えばということ、こういうようなコースを設けていけばどうかというお話をいただいております。「目的意識」のところで、㉓で教育システムで到達目標というお話をいただいたり、システム面では、㉕で日本の義務教育の良さを残したシステムの必要性についてお話をいただいております。

次の『良識の再構築』ということで、お話をいただきましたのは、倫理観とか畏敬の念とか宗教的情操という言葉をしていただいておりますが、事務局の方で「良識」という言葉を使わせていただきました。資料2では、①で宗教的情操の大切さ、③で日本人として育っていく人間の誇り、⑧で絆とか倫理とかいう言葉をいただいております。⑪で物事を畏れるもしくは畏敬という話をいただいております。規範意識の方では、㉗で犯罪を起こさないように育てていくこと、悪いことを認識出来るような人間に育てていく、そういう話をいただいております。

3つ目の『国際化への対応』という、国際化の進展を踏まえた対応ということですが、資料2の6ページになりますが、①のいろんな国のいろんな民族の方々が日本で生活されるようになっているとか、国際化イコール英語ではないということ、⑥で英語を話せる人が国際化する社会に対応出来る人間イコールにはならないということ、⑨の最後のあたりで日本の美しい言葉を自分のものに出来るような教育課程の研究とか、多文化共生のあたりで、⑩で日本にも外国の方がおられるのでその方々と仲良く仲間になりつつ気さくに心を通わせること、⑪で日本に来ていただくことでの国際化、⑬で外国の人と接することの必要性をご意見としていただいております。

4つ目の『人と人との絆の再構築』として、資料2は7ページになりますが、③で絆・倫理の原点は家庭にあります、家庭の絆が恐ろしく稀薄になっていること、また、⑤の地域では人間関係が希薄化している、それ

からコミュニケーションのところでは、逆に⑩で人を信頼する芽生えとか、安心して人と関わっていける芽生えが伸びていけるようにという発言もいただいております。次の8ページの⑬では人の心の痛みが分かる、思いやりの心を持って、行動出来るということで、そういう人との関わり等の心構えと、⑭では今の課題として人との関わりが出来ない、また、話が出来ない、友達が出来ないというコミュニケーション能力の不足のご指摘をいただいたということから掲げております。

5つ目として、『地域独自の教育システムの構築』ということで、資料2の9ページになりますが、②の中央集権的な形から、地方分権の形、あるいは地域・現場での教育という形に変わってきていること、システムということでは、⑦でいろんな取り組みをする中で滋賀でやれば根っここのところでは繋がっていると一つの示唆をいただいたと考えます。また、システムづくりの基本として、⑬で学校教育は子どもと教師の本質的な人間関係の交わりであるといいただいております。具体的には地域ということで、⑯で地域に根付いている文化とか産業とか歴史について見つめ直すことが出来るということで「地域探訪」という具体の例を取り上げていただきました。⑰ではシステムに対して、果たしていろんなシステムは変わっているけれども、子どもが本当に幸せになったんだろうかということの一つの提言としていただいております。同じようなことになりますが、⑳で子どもと教師が人間的な繋がりを持って指導していくには、どのようなシステムが良いのか、というご意見をいただいております。それと家庭の話になろうかと思いますが、㉑で親自身が子どもをどう育てたいかという目標を出せればというご意見をいただいております。

それから最後の『子どもの声に寄り添う教育の展開』ということで、これは子どもの実態をどういうように把握していくかということで、それを一つの柱として上げてはどうかというご意見から上げております。資料2の11ページになりますが、②で子どもの実態として特別支援をという意見が出ております。それぞれの子どもに応じた教育・指導ということが教育の基本であるということ、⑥では少し反省ではありますが、現場の先生・地域・家庭の方は子ども達の声を実際に聞いているのかというあたりがございます。資料1の子どもの声に寄り添う教育の展開というところで、意欲とか主体性という言葉は、実は1回目、2回目の会議では出ませんでした。いろいろといただくご意見の中にありまして、今の子ども達に意欲や主体性が感じられないということで、言葉として出させていただきました。いただいたご意見の中では、⑬でいろんなことを体験する中で、自分はこれが好きだということを見つける、⑯・㉑でやらなければならない体験とやりたいことを見つけられる体験という観点でお話をいただいております。㉒で子ども自身が自分で学ばないと出来ないような学習もお話としていただいております。最後の㉓・㉔は教育システムとも関連するかと思いますが、現在の子どもの状況として、特別支援の必要な児童生徒、集団

への不適應、耐性の不足、コミュニケーション能力の不足ということをご意見としていただいております。

こういうものをまとめさせていただきまして、資料1、資料2としてお示しさせていただきました。

引き続いて資料の3でございますが、今後の進め方でございます。今日は第3回目で、今の基本理念のご協議をいただきますが、6つを一度に議論していただくのは難しいと思ひまして、もう1回この形で議論をお願いしたいと考えております。従いまして、今、第4回の日程を調整中でございますが、来年の1月下旬あたりでお願いしまして、年度内では3月くらいには5回目で一つのまとめのような形をしていただければと考えております。年度が明けまして、4月には再度論点整理をして、5月には一定の素案をお示ししてご検討いただけたらと考えております。8回目でいただいた形にして、県民政策コメントという形で、一度公表をしていきたい。そこでいただいたご意見をもとにしまして最終的なまとめを8月にさせていただいて、あと、若干の修正等を加えて、秋には提言という形でいただけたらと思っております。

事務局からは以上でございます。よろしくお願いいたします。

- 会 長 お手元にお届けした時に、いろんなことをお考えになったことと思いますので、少しその点をお聞きして、共通理解も図りながら、議論していけたらと考えております。今も説明がありましたとおり、これまでの1回、2回のいろんな議論、ご発言を踏まえながら、この6つの柱を立てました。それで、資料2としていろいろご意見を上げておきましたけれども、「いやあ実はこの意見はそちらに入る意見だ」、「これはこちらだ」という意見もあるかもしれませんが、大きく捉えてこの6つの柱のご了解を最初に得る必要があるのではなかろうかと考えています。

この点はどうでしょうか。よろしいですか。

今の学校教育が抱えている、ある意味で先端にある問題を取り上げていると思いますけれども、キャリア教育がそうですし、やはり社会というものを念頭に置いた規範とか行動とか「良識の再構築」と名前は付けておりますが、そういうところとか、国際化という問題、これは特に滋賀県の場合は外国人が急激に増えている、そういう点もあります。

それから、大きな教育改革の動きの中で、英語がどうのとか小学校英語がどうかということを言っておりますけれども、実は英語教育だけに矮小化して取り上げられる問題ではなくて、やはり非常に大きな問題である。

それから、人と人との絆という、やはり、親子関係から始まって、地域の人との関係、また教師と生徒・児童、友達同士、なかなかそれらがうまくいかないような状況、全体を通して大きな根幹にある問題のような気がします。

それから、地域独自の教育システムの構築がありますが、いわゆる文科

省・県教委・地教委・学校と流れていく中央集権的なこれまでの在り方に対して、そのこと自体はなくなりはありませんけれども、地域の実力を付けていくという一つの教育システムが必要との発言がございまして、これも、先端的な問題だと思います。

そして、最後のところは、今、教育改革が国でいろいろ進んだり、県があるいは市町がいろいろ考えたりしますけれども、今、一番考えなければならない大きな問題は、いじめを始めとして子どもを取り巻く今の深刻な状況だと思うんです。これが一杯起きている。そのことにきちんと対応出来る教育、やはりこれが一番もとになることだと思うんです。これを「子どもの声に寄り添う」という言葉にしましたが、教育の受益者の方からもっと考えていく。こういった感じですけども、ご意見がなければこの6つでいかせていただきたい。

- 委 員 今の事務局の説明と、会長の解説でいろいろ分かってきまして、まだ大雑把ではありますがまとめていただいたのかなと、そんな思いがいたしますが、後でまた話題になろうかと思いたすけれども、じゃあこの6つをどうまとめるかというあたりが、これから検討することかなと思っております。一つ先走った話になったら恐縮で申し訳ないですが、基本理念というとか何か一つの言葉で言い表すのではないかと、6つというのは過大かなという感じがしております。何かこの6つを束ねる言葉というか文言というのがうまくまとまってくると、それが基本理念と言えるのかなとそんなことを感じました。

これは追々分科会で議論が進んで、全体会をする時の課題になるのでしょうけれども、そういう視点を持って進めていくのも一つやり方かなと考えております。

- 会 長 委員の言われることはよく理解出来まして、今回の進め方は、まず皆の意見を出し合って、そこから帰納的に段々段々やってきた経緯がある中で、この6つになった訳で、委員が言われるように、これがさらに詰められた挙げ句は、最終的にはキャッチフレーズが必要になりましょうから、それも念頭に置きながら分科会を進めていただいたら、次回の分科会が終わって、その次からそういったことが議論出来ればいいと考えています。他にはないでしょうか。

- 委 員 この教育協議会で扱うものではないかもしれませんが、雑感ということで捉えていただければ結構ですが、今回の高校の教育の問題に関わりまして、滋賀県でも履修問題が随分取り上げられました。

改めて今の教育の実態の一面が、如何に良い大学へ実績として何人入れるか、こういったことが、私達が今一生懸命理想と掲げている観点とは別個の現実問題として眼前とある事実には何か虚しさのような、ある意味公教

育の壁のようなものを感じている次第です。

いろいろこの観点は私達が教育でしなければいけないと十分に分かっているはずですが、現実問題はそれとは全然違うところで一般の保護者や社会の評価がなされている。そのことについて、私自身、今後、教育に携わるものとして、もう少し自分の中で煮詰めていかなければならないものがあると感じている。

○ 会 長 大事な問題であります。

例えば、ここでは6つ上げさせていただいた中で、一番下のものは今の問題とは関係ありませんが、問題意識は似たところがありまして、上の5つは作っていても、そこから非常に違ったところで動いている子どもの世界が一杯ある。ここはやはりきちんと見ないと、理想を書くだけではやはり駄目だという思いがしております。

今、委員が言われたことは、これまでのも含めて受験体制の中の教育というものが厳然とあることに対して、どうなんだという話であります。これは少し念頭に置かせていただくということで、今ここで扱うのは非常に難しく、少し考えどころだなという思いがしております。言われていることはよく分かりますが、教育は案外それだけで動いていないと思うんです。クローズアップをされていますが、その他の一杯いろんなことがあります。それこそ入試制度から何からあらゆるものが関わってくる。地域で考えるのも重すぎるかなと考えますが、しかし大きな問題です。

少し念頭に置かせていただきたいということでどうでしょうか。他にいいですか。

○ 委 員 この6項目と教育の現実ということに当てはまるんですが、今言われるように、今後、大学全入時代が到来すると言われるので、大学入試の関係と教育の兼ね合いということではなくて、あらゆる角度から見ていき、これらを確実にやることによって、この6項目が滋賀県でなければ出来ないというものとして作り上げていければと思います。そうすれば、国際社会にも対応出来る人格、精神が備わっていく感じがします。

○ 会 長 残りの時間との関係もありますので、一応、この6項目からスタートすることにしまして、分科会の委員の構成はこれでよろしいでしょうか。前もってご了解は得ていると思いますが。

○ 委 員 この議論の視点というところですが、上の3つの中で、国際化への対応の中で、だいたい出ているんですが、多文化共生とか、英語だけではないというのは出ていますが、やはり、「日本文化の重視」といった視点を入れて欲しいと思いました。それは、やはり国際化といえば外国の何々を吸収するといった一方通行の動きになってしまいやすい。日本文化の重視

というのは、地域の良さ、歴史・文化、滋賀県のそういったものを含めて日本文化をどのように吸収していくか、ということを視点の中に入れていただければと思います。

- 会 長 その視点は入れさせていただきます。今は国語重視とかいろんなことを言われているので、日本語も含めて日本文化と言うことで載せさせていただきます。

関連しまして、これから先何をやるんだということを詰めていきたいんですが、これは今、大きく基本理念として出ている。その両極として、学校ではこういうことをやるべきだとか、極めて具体的な話をやってきた訳であるが、しかしながら、こことこの中間があると思う。少し抽象的だけれども、こちらの具体的な展開を予想させるようなものが、そのあたりをしっかりと議論する必要があるのではないのでしょうか。学校でこういう科目をやれということはものすごく具体的なことで、それに繋がる真ん中あたりをきちんと議論しておく必要があるのではないかと思います。議論しながら段々見えてくると思います。

それから進め方ですが、隣の委員会室でグループ分けした席を用意している訳ですけれども、分科会の会長を決めさせていただきたいと思いますが、キャリア教育の分科会は板倉委員、良識の再構築は私が務めます、国際化への対応は千原副会長にお願いします。

そこで、取りまとめ、あるいは進めていただきまして、終了後、またここへ集まっていただきまして、それぞれの分科会長から5分程度、こんなことを話したんだということを報告していただいて、共通理解を得ていく。質問時間があれば多少質問して、今日はそんな感じで進めていこうと思います。

時間は、15:40までと思っております。1時間半程ですが、少人数ですのでどんどん喋っていただけたらと思います。

- 3つの分科会に分かれ、第4委員会室で議論を行うこととした。

第3回滋賀の教育協議会議事録（分科会：キャリア教育の推進）

1 開催日時・場所

平成18年11月13日(月)午後2時15分～午後3時40分
滋賀県庁本館2階 滋賀県議会第4委員会室（大津市京町四丁目1番1号）

2 出席委員（五十音順、敬称略）

板倉安正委員、尾賀康裕委員、小巻おさみ委員、中居和平委員、西村勝晴委員、
山本真理子委員

3 分科会議の概要

- 分科会長 キャリア教育の推進ということで、まず、各委員のこんな課題があって、こんな問題をこんなふうに進めたらということの思いなどを述べて欲しい。

私は尾賀委員と一緒に近江八幡市で文部科学省の地域指定受けましたキャリア教育の推進というのを3年間の研究で進めておりますし、また、それ以外にも県でキャリアスタートウィークということで週5日の職場体験が進められておりますが、どうも週5日の職場体験がイコールキャリア教育と安易に捉えられているようで気になっています。

そうではなくて、子どもが生まれて育っていくプロセスの中で、自分自身がどう生きていくかということ、自分の中で育てていくことだと思います。そういうことについてはキャリア形成とか、最近はキャリアデザインなどいろんな言葉がありますが、この言葉が適当かはまたご意見をいただくことにして、基本的にはキャリア教育というのは子ども達に何々をなさいと言うのではなく、子ども達が自分でキャリアをどう育てていくかというところにあるのだろうと私は捉えています。そういう捉え方の中から、今回教育の根幹に関わることを議論していただいている中で、こういう場で子ども達に投げかけるとしたら、どういう思いなりテーマを私達は提言していけばいいのか、委員から意見を出していただいて、議論する中で深められればと思います。

- 委員 キャリア教育というと新しいことのような印象を受けるが、私の中では勤労への感謝が土台に無ければいけないと捉えている。自らが働くということの大切さをしっかりと身につけた上でのキャリアの体験でないといけないのではないかと個人的には考えている。

ところがキャリアスタートウィークと混同しないようにと言われると、確かに混同していると感じる。それは今いくら体験がキャリア教育だと言って、子ども達になるべく幅広く体験させたいと思っても、地域の中であって労働の大切さ、あるいは幅広く体験をさせて、そこから自ら道を選ば

せるというところとは程遠いものがあると感じます。

理想では、例えば田んぼ、畑の中で汗して収穫を得るその1年を通した喜びとか、目に見えない素晴らしい技術をもって黙々と産業の基礎を支えている方を、実際に肌で感じて、職業現場で油に汚れて働いておられる姿だけではなくて、その中に光る技術、そういったものまで子どもが掴み取れるような体験をさせたいとか、理想はあるが、今の実態は、例えば病院に実習に送るといろいろと制約があって、実習をさせることも、ちょっとさわらせることも出来ない。ただお客さんの案内で1週間を過ごすという実態もあるし、なかなか小学校からという地域性の中で、近場で体験させるだけの枠でしかなく、その枠を出すことは出来ないなどの制約もあって、1週間という中学校の時数の中で、事前事後の研修からまとめまでするその労力と授業時間数の確保との兼ね合いとか、そういう実際に実行するに当たっての課題も厳然としてあります。キャリア教育というとういうものが一気に私の中に出て来るというのが現実です。

- 委員 子どもがキャリアを自分から見通していく過程に学校教育は関わると思うので、それには発達段階別に組んでいかなければならないと思う。小学校、中学校、高校の発達段階別に、こういうものを与えるというものを具体的に出して行って、その中には必ず体験というものを含める必要があるのではないか。発達段階を考えて、この時にこういうもの、この時にこういうものというように計画性を持ってやっていかなければならないと思う。

ふるさと教育ということが意見で出ていたが、ふるさとを市とか町とかを指すとすれば、そこに止まっていたは駄目であろう。それが県になり、最終的には国という形になって行って、そこに愛国心の問題も絡むかもしれませんが、そういうものに広がっていくようなふるさと教育が必要と思う。時間としては今の総合的な学習の時間とかロングホームルームとか、先程の5日間の研修を含めて、発達段階別に具体的に与えていく。そして、高校3年になればこのくらいに到達しなければならないという、到達目標のようなものを、小・中・高とも持つことが必要と思う。

どういものが到達目標かと言われるともう少し考えないと説明はなかなか出来ないが、そういう思いを持っている。

- 委員 キャリア教育の原点、今回の教育協議会の原点は、結局、親も子も自分で立つ「自立」と自分から律する「自律」を如何に出来るかという、その教育を目指していかなければならない。誰からも与えられるものでない、誰からの指示で動くものでもない、自分が律しながら、自分が自ら考えて、自分が立つという人間に如何に育てるかということが教育の原点だと思う。もちろん算数とか国語という学習も大事ではあるが、結局、原点は人間は生きていかなければならない。

今は誰しものが将来生きていると思っているし、多分、誰かに助けてもらえとか、社会的に福祉で飯を食べられるようにしてくれると思っているが、実を言うとそうではなくて、自分が生きなければ誰も生かしてくれないのです。戦後の時には、あのおじさんの持っているジャガイモ盗まなかったら明日死ぬという世界があったのです。今の子ども達は、でもお米も誰かがくれるだろうと思っている。それが間違っている。そんなすさまじい世界でなくても、人間として何故働くのかと言えば、生きるために働くのだということをきっちりと教えるのがキャリア教育の原点と思っている。

ただ生きるだけでなく、暮らしを守るということ、家族も当然いるだろうし、自分もこれから家族を作るだろうし、これは地域の連帯になるかもしれないし、そういった今度は暮らしを守っていくということ、生きるというのは自分が生きて、また生命を継承していくということ、次は、一人では生きていけない訳ですので、いわゆる村というか、暮らしを守るということ、最終的にはああ生きててよかったと思えるような人間らしい生き方が出来るかどうか。人間らしく生きるということ、この3つは何を通して出来るかということ、仕事を通してでないといけないのです。誰からも与えてくれるものではない、その自覚があればきっと自分を律しながら立てるだろうと、それがキャリア教育の究極の目的であり、そのために具体的に何をするのかと言った時に、職場体験なりインターンシップなりもしくは企業倫理、C S Rとか、何のために働いているのですかという部分を教え込まないと、先程委員が言われたように、とにかく大学に入る事が目的の教育になっている。

では、大学に入ったら生きていけるか、大学入ったら大丈夫なのかとなった時に、大学に入ってみただけで実際自分の生き方が分からないといって、ニートになってしまう者が出てくる。それは自分を全然律しられていないし、立てていないということなのです。どうして生きていくのかということを切実に子ども達を感じるような、そうしたものをもっともっと醸成していかないと、社会そのものが、あまりにもパラサイトしすぎと思う。

それは子ども達だけに教えるのではなく、親にも教えなければならないし、社会も切実に子ども達に感じさせる社会にしていかなければならないと考えると大きな問題になるが、キャリア教育は学校と企業と地域が一体とならないとなしえていかないと思う。

○ 委 員 私自身は、自分で生きるためにというのが念頭にあるのではなくて、欲張りな観点かもしれないが、人は次の時代を作るために生きているというか、何らかの役割があるというような考えを持つ人間で、人のために役立つとすれば、自分が地面に足を着いていないと人の支えになれないのだから、あなたは力をつけないといけないということを子どもに話したりするのですが、そうすると独りよがりで生きるというのが、生きることだけ

ではないし、そういう観点を私自身持ちたいと思っている。

小学校くらいの段階ではお父さんの生き方を知るとか、お母さんは如何にして主婦をしているのかとか、どんな役割をしているのかとか、そういう段階から始まって、それから大学では何々学説を唱えた人をずっと勉強するとか、そういうような形で中学生や高校生段階になれば、地域の人を取り上げたり、ある職業の方を取り上げて、その人の生きてきた段階を知りながら、その時何を考えたのか、何を目指そうとしたのか、共感する部分があるか、参考になる部分があるか分からないが、そんなところがプログラムにあってもいいかなと思う。

- 委員 中学校が職場体験を2年生でやっているが、1年生は大阪にある職業を体験出来る施設に行きましたし、それをまとめて3年生では大学スクール見学を行っている。これが意外と生徒に受けて、1年2年と職業体験して、3年で大学へ行って、大学が自分にとって非常に新鮮なもので、大津と京都の大学に行ったが、報告書を読んでいると、生徒が非常に感銘を受けたというようなことを感じている。これも非常に大事なキャリア教育ではないかと思っている。現場としては授業時間を確保しながらの5日間の職場体験は非常に難しい問題ではあるが、私は親の職業と一緒に体験するというのはどうかと思う。

さて、高校の方ですが、専門学科では高校を卒業してすぐ職業に就くという観点から、キャリア教育は意義があると思っているが、普通科では中学校の学習内容が高校にきたり、高校での総合的な学習の時間や情報で時間が削られるなど、時間数がない中で、一方大学入試は全然変わらないということで、高校教育にしわ寄せが来ているという状態です。

それで、普通科高校が、そういう面で、キャリア教育を考えた場合に、参考になるのは福岡の城南高校でドリカムプラン、ドリームカムトゥルーと言いますが、夢が現実になる、そのための手だてを学校教育でどうやっていけばよいか、というものがあまして、1年生から高いレベルの職業意識を持たせるということで、裁判所に行くとか弁護士と対談してみるとか、研究所の研究室へ行くとか、マスコミの報道局に行くとか、かなり高いレベルのところへ派遣させたり、九州大学の教授に来て貰って、学問についても情報を流して貰ったりと、そういう積み重ねの職場体験をした結果、生徒達が非常に目的意識を持った。そういうものがないと、例えば理科・数学が出来るから医学部に行くとか、英語が出来るから文学部に行くとか、社会が出来るから経済に行くという選び方ではなくて、実際に職業を見ることによって、自分の適性にあった職業観を高校の早い段階で認識させることが、目的意識を持たせ、到達目標をはっきり持たせることで、3年後の入学試験、学力試験に適應出来るような能力を高めることが出来るというポリシーの下に、ドリカムプランを立てられた結果、国公立の合格がそれまで40～50名から160人くらいになったという結果が出て

いて、全国的に有名になったプランで、今6・7年経っているが、高校のキャリア教育とりわけ普通科高校、大学へ行く生徒が多い高校で大きな示唆を与えてくれた実践だと考えている。

我々も取り組む場合にはそういう観点で進めていかなければならないと思っている。知識注入型で、大学入試がどうだから世界史がどうのというレベルの問題ではなくて、本当にその生徒にとって自分の進むべき道がどういうものかということが分かれば、自ずと学力は付くような生徒達になっていくだろう。

○ 分科会長 そのドリカムプランは何時間くらいやっていたらしゃるのですか。

○ 委員 1年生の授業時間を割いている。1週間まるまるではなく、1日単位である。

○ 分科会長 最初のオリエンテーションと帰ってきた後のケアが大事だと思いますが、そのあたりはどうですか。

○ 委員 そういうことも克明にやっているようです。最初は小論文的なものを書かせて、何になるか、ドリムを書かせて、それに応じたメニューを用意していくというもの。

○ 分科会長 ただ行っただけではそういうものが生まれてこないの、準備が大変かと思います。まず各委員から意見をいただきましたが、質問などはありませんか。

○ 委員 夢づくりプランということだが、子ども達の目的意識で、こんな仕事をしたいという思いの向こうに何があるのか。「あなたの尊敬する人は誰」と小学生に聞くとつい1年前は、堀江貴文と書いた者が8割いた。時代の寵児で、お金儲けして何が悪いという感じで、あの人は大きな会社を作って、上場してすごいということだが、彼のやったことは、お金でお金を生み出して儲けただけ。目的というのはお金持ちになりたいとかではないと思うので、弁護士とか医者とか大学の先生とかが出てきているが、将来お金が儲けられるからというふうな観点であると、世の中おかしくなると思うので、そのあたりはどうなっているのか。

○ 委員 知的に刺激を受けられるような職業を選んでいると思う。汗水流すというより、そうした職業に就けるわけではないが、もう少し観点の違った職業を選ぶような方策でされていたように思う。

○ 委員 先程私が計画的にと申したのは、非常に単純なことで仕事を決めている。

高校3年生を毎年面接しているが、例えば看護師になりたいと言う、何故かと聞くと、骨を折って入院した時に親切に世話をして貰ったので、ああいう看護師になりたいということで、看護学校に行くということ。ものすごく単純。また、法律を勉強したい、家が金を借りて、金貸しに追いかけて、親は逃げて今はいない、そういう環境からして、そういう人が世の中に居るに違いない、法律を勉強してちょっとでも役に立ちたいとか、単純というか、ちょっとした動機で職業を決めているという者が多いので、ある程度計画的に、職業観などいろんなものを与えていかないと、閃きで決めるという可能性を秘めている。高校3年でもこの程度です。

○ 委員 何故先生になろうとしたのか。

○ 委員 私にはモデルがあった。悪いモデルが、中学2年の時にあった。それは単純なものであった。自分がそれに向いているかどうかは疑問である。しかし、幾つも経験してこれに決めようとする余裕のない世界でもある。職業についても誰でも偶然性はあると思う。

○ 分科会長 生徒はある程度世の中を見ているのではないか。ただ、職業に就くというのは、かなり単純な動機ではないだろうかと思う。私のところでは350人の定員で、約半分は幼稚園・保育所の先生を目指す学生だが、話をしていると、幼稚園の時に優しくしてもらったとか、女性がやるには良い職場だとか、そのくらいでやろうと思っている。

○ 委員 パツとした閃き、パツとした経験、誰かに出会ってその人がアドバイスしたそのこととか、そういうもので決めたりしている。そういうように決まっていくのが良いのかも知れない。いろいろ考えればむしろ決まらないとも思う。

○ 委員 医者に助けていただいたから医者になりたいのであればいいが、医者は儲かるぞなら具合が悪い。サラリーマンになるという場合、どんな仕事がしたいのかと問うと、有休が多くて、給料がたくさん貰えてという会社を就職ガイドから探して、エントリーカードを送るという、そんな発想になってしまっている。本当にその仕事がしたいのかと思う。給料が高くて、有休がきちんとしている会社なんて作れない。そのあたりが夢がないというか、目的意識がないというか。

○ 分科会長 最初からすごくは考えてはやっていないので、ちょっとした動機からだと思う。そうしたことをやりながら、働く意欲なり何をやらないといけないのかということが育っていくのではないかと思います。それは、その人が勤めている周りの環境に左右されると思う。それが大事だと言ってやら

ないとその仕事に就く前には、そこが大事だということは分からないと思う。

例えば、手に技術を持つ人は、ここが大事と最初から言っても、何にもやってない段階でこれが大事だと言われても分からない。勤めて、働く中でだんだん伸びてくる。先に委員が言われたように、子ども達の発達段階に応じて、段階を踏んでいくということを伝えてやるが必要で、君はこの間までこれが出来たが、中学校になったらこれをやろうよみたいなこと、そういうことが出来るのが面白いと思う。

- 委員 縦の流れではそう思うし、横の流れで家庭ではどのあたりまで指導というか、影響を与えられるか。あるいは地域はどうかとか。公民館と小学校とがやっておられる、地域でどれくらいキャリアに影響を与えられるのか、縦とともにそういう横幅がいるように思う。

どこかで良い刺激を受けてキャリアというものが出来ていくのかも知れないが、どこがというと難しいと思う。どの段階が影響を及ぼすかは分からない。

- 分科会長 それは子ども、子どもで、ある子はここで感じて、ある子はこうなってそうになったかも知れないしと、いろいろと思うのですが、そういうことから今体験の機会を出来るだけ多く作ってあげようと言うのが、一つの方向だと思う。

だから、職場体験やっていたいっているのも、最初は挨拶からですね。とにかく人にあったら挨拶をする、すごく単純なところからやって貰っているのですが、それでもやはり子どもは短期間でも変わってきますよね。それと受け入れ先の人も変わってくる。「最近の子どもは駄目だと思っていたが、接してみたらなかなかいい子だった。」と、それらか後は気楽に子どもに声かけられるようになったと聞く。

地域と企業と家庭と学校との繋がりを持つ、それがきっかけになる可能性があると思います。

- 委員 今、縦ということで幼稚園の現場で気を付けて見ていると、子ども達の自主性に任せていると「ごっこ遊び」が乏しくなっている。現場からの声だが、「ごっこ遊び」はキャリア教育の原点になるような遊びと思うが、それを意識して教育の中で仕掛けていかないと、子ども達がしなくなっているというのは、特にマンションの多い地域を抱えている幼稚園の現場の声です。土に触れて遊ぶのがはじめはやはり汚いとか、そういうところからバリアーを取り除いて、仕掛けをしないと、どろんこになって団子を作って遊ぶとかを、仕掛けを作らないといけない。

- 分科会長 幼稚園の現場では先生に仕掛けをやってくださいと言っておられるので

すか。

- 委 員 はい、「ごっこ遊び」が乏しくなっているという危機感を先生が感じているので、「遊びの現場はどうですか」、「ごっこ遊びはどの程度していますか」とか、そういうことを注意しながら聞いて回っている。

そうすると、キャリア教育の原点に子ども達自身が、そういう仕事を見聞きする観点が、欠如してしまっている。そういう裏の問題があるのではないかと思っている。それを保護者が意識している場合には良いのですが、そうでなくて部屋の中で親自身も閉じこもり気味になって、必死で子育てをしている状況では、とても望めない。

そうすると、教育の中でそういうプログラムを持たないことには、例えばお父さんの働いている姿を見せましょうといっても、お父さんが働いていないような状況や遠いところで働いている状況では見せられないとか、今の情報化社会で、パソコンにじっと向かっていることが働いているというのはこちらが意図するところとは違うとか、いろいろあるので、何か観点というか、意図をもった縦のシステムをきちんと教育の中で作ることが、必然的に求められているというのが実感です。

- 委 員 個人についてはそういうことと思うが、集団づくりというか、集団で何々するというその養成をどうするのか。青少年育成県民会議で、イギリス、オーストラリア、アメリカ、ドイツと日本の5カ国が集まって、青少年を育成するにはどういう方法がいいのかという話になった時に、必ず一番良いと出てくるのが、野外活動、キャンプです。キャンプは集団生活を教えるのに一番良いと、効果的であるとどの国も言われたことが印象に残っている。キャンプは助け合わないと出来ない。火を焚いたり、テント張るにも、何をするにしても共同作業です。あれが一番いいと、あれをせずして集団の育成は無いという人もいたほどである。2年続けて会議に参加したが毎年それが出てくる。会社に入っても、コミュニケーション面で、人間関係がうまく作れないということでは、個人としては良かっても、会社全体として、集団としてうまく働けないということがあるから、個人のキャリア育成ということと、集団で何々することが出来るという力も付けてあげないといけないと思います。

- 委 員 確かに昔は働くシーンがたくさんあった。お菓子屋さんがあって、その前が新聞屋さんで、横に自転車屋さんがあって、履物屋さんがあって、本屋さんがあって、自分のところもお砂糖を売っていて、隣も縫い物をしているなど、全部何か商売をしていらっしゃって、子ども達はそこで遊んでいる。そこでは「ごっこ」遊びをしようということになるのですが、今はみんなスーパーにある。

- 分科会長 例えば、自転車屋さんが自転車を解体して、パンクを直している姿を見ている。
- 委員 今はそんなシーンはどこにもない。
- 分科会長 「集団をどう作るか」は大きなテーマと思う。最近の大学でも学年を超えてのコミュニケーションが出来ない。滋賀大学に居た時に1年から4年までいるが、昔なら1年から4年の誰かに「これやるからみんなに伝えておいてください。」と言えは伝わっていたのが、それが出来ない。しかし、同世代間は早く、メールなどで1時間しないうちに横に伝わっている。ところが学年を越えてはすごく下手である。横はお互いに慰め合っている。そこだけはものすごく仲がいい様な感じがします。一つ下の者にはずばっと命令しても良いと言っても、それも言えない。上に対する言い方を知らない、特に先生に対する言い方が全然出来ない学生がいる。
- 委員 「私、自殺します。」と言って、文部科学省に手紙を送るということは発想すらしなかったが、そこまで言わないと誰も私のこと気にしてくれない。横からシカトされたら、上も下もコミュニケーションがないから、いじめによって横の連絡がぷつんと切られたら、親も知らない。もちろん兄弟も知らない。同級生はいじめている。では、どこに言うのか。文部科学省になってしまうのかな。考えられませんが、それくらい孤独になってしまうのが、如何にも脆い、上と下との絆が無くて、慰め合っているところで、はじき出されれば行くところがない。
- 分科会長 一人にならざるを得ないという怖さがある。横の集団だけでは駄目で、上下の集団を作らないと。
- 委員 クラブ活動は大事なものである。高校では3学年だが、一つの組織になっている。うまくいっているかは分からないが、一応人間関係は保たれている。
- 分科会長 クラブ活動は、かなりの部分が指導教官に左右されると思われる。昔は自然発生的に上から下の子までいて、小さい時は助けて貰っている。
- 委員 中高一貫校では、体育祭は縦割りでやります。高校生が中学生をいじめたりしないか、問題は起きないか最初は心配していたが、高校生は皆お兄ちゃん、お姉ちゃんして中学生を指導し、うまく機能している。
- 委員 そういう計画、仕掛けをすることは大事です。仕掛けがないと、ほっといたら彼らはしない。

○ 分科会長 滋賀大学の附属養護学校に行っている時、小学部から高等部まであるが、運動会は縦割りをやります。どうするかと見てみると、きちんと上の子は下の子の面倒を見ます。不思議とそうするもんだと思うんですかね。

○ 委員 私も養護学校で勤務したが、養護学校はそうですね。ある程度は自然にします。

○ 分科会長 仕掛けをすると、全部が完全には出来にくいところはありますけれども、上の子は下の子の面倒を見るものだという意識を持つようです。

○ 委員 非常に純粹にね。

○ 委員 今の意見でも、昔は地域でいろんな職業が見られたし、そこでいろんな体験が出来た。家庭でも親が働いているところをみて、手伝っていたが、そういうことも出来なくなった。「ごっこ遊び」自体が出来ないから、そういうものを学校が全部地域に代わるもの、家庭に代わるものの仕掛けをしていかなければならない。全部学校が負わなければならない面もあるが、小学校で「ごっこ遊び」を補うような、キャリア教育の視点から、1年から6年までの計画・プログラムはありますか。

○ 委員 中学校のキャリアスタートウィークが始まる前に、各学校が自主的に2日とか3日とかで、ずっと前からやっている訳です。草津はたまたま地域協働合校という事業での推進がありましたので、学校5日制になって、どのように子どもを地域が受け入れていくのか、そういったものが相俟って、草津の場合は、自主的な活動が基本にあります。そのお陰でキャリアスタートウィークの5日間を、多少の問題があるにせよ、何とか軌道に乗せることが出来ると思っております。

例えば、田んぼと言っても学校・園でちょこっとやる程度で、「収穫の喜び」となると、地域に出かけて行って、餅米も作らせて、餅もつかせて、食べさせなければなりません。製品と言っても、一から十まで製品を作って、その分の付加価値でもってお金をいただくという、そんなことも出来ませんし、学校で農作物を作って、売るということも出来ませんし、どうすれば目的とすることが出来るかということがしっかりと見えない中で、今までやってきたことの延長をとにかくやっていく。

一つ面白かったのは、財政が厳しかったので目をつぶっていたのですが、幼稚園で管理補助員さんがいろんな野菜を作られ、芋からキュウリから夏には茄子とか一杯出来ますが、それを送り迎えされる保護者に持って帰ってください、もしも許されるなら次の種を買うのに、自主的にとお願いしたら、園児がお母さんを連れてきて、これはとってもおいしいから買って

くれとか、とにかくおいしそうに見えなくても買って欲しいといって、取り合いになる程の人気です。

日常の世話を自分がしているわけではないが、それを見聞きし、大きくなって収穫されるのを、ずっと見て、出来たものがある。それを持って帰ると、嫌いな物でも喜んで食べてしまうと言う。これは何とか生かせないかなという思いと、その話にはおまけがあって、保護者自身が喜んだ。それは、そういう野菜があんなふうにしてなって、食べられるということを知って喜んだんです。

- 委員 昔は必ず夏休み前になったら、1年生から6年生まで集めて、地域別に集まって、そこに顧問の先生がいて、ラジオ体操はここに集まってすることとか、何日は学校、お寺の草引きなど、必ず決められていた。それは50年代くらいで終わった。

夏休み前には必ず地域別集会があって、上の学年から下の学年までその地域のものが集まって、長を決めて、ラジオ体操はここに集まってすることとか、行かないと怒られたり、草引きしたりしていたが、今は中学校でも地域活動は無くなっている。

- 分科会長 PTAとしては1年生から6年生まで一緒にするという仕組みとか仕掛けはあるのですか。

- 委員 小学校によるとは思うが、町別児童会はまだ大津は夏休み前もあるし、春休み前、冬休み前にもあります。

- 委員 中学校は無いでしょう。

- 委員 中学校はないです。小学校は町別児童会がありますが、何年か前は奉仕作業の日というのを決めて、町遊びの日を決めてやっていたが、今は人数が減ってきて、町に子どもが一桁しか居なくなってくると、町遊びも出来ない状況になってきたので、もともとある子ども会や自治会がされる地藏盆や夏祭りなどに吸収されるような形になって、学校の枠組みである町別児童会が機能してやっているところより、吸収されてやっているところの方が多と思う。

- 委員 学校の掃除などもお母さん方がされている。昔は子どもがしていた。親は田に行くのに忙しくて学校に来れなかったので、子どもが運動場などの草を取っていた。この頃お母さんが行って草を取っておられる。

- 委員 私の小学校では3・4年前でも、PTAでも、来る親来ない親のばらつきが出てきたことから、地域ばかりにお世話になってはということで、

校長先生の考えで、翌年からやめになった。学期が始まって、子ども達が徐々にやっていくという形とか、PTAの中でも理解して自主的に来ていただいて、子ども達がやっている作業を親が手伝うという形で、私の小学校ではやっている。子どもが減っているのに学校は同じ大きさなので、掃除の手が行き届かないことになり、地域が動かしてきた部分もあるのかなと思う。

- 委 員 広い意味でキャリア教育に入と思うが。
- 委 員 草刈り機を扱える保護者は格好いい。
- 委 員 便所の掃除をしたり、それも広い意味ではそうだと思う。
- 分科会長 草刈り機というより、昔は鎌だったが。
- 委 員 今の保護者には鎌もない。つまんでいる。
- 委 員 今は、鎌の使い方も教えないといかないようになっている。随分変わっている。変わっているが、それで駄目であったら、そういう機会を与えてあげなければならない。
- 委 員 鎌の使い方など、これは危ないのでこうだなど、上の学年になったら、きちんと教えたりしながらやってますと何年か前に校長が言っていたが、ほったらかしで渡してしまうと実際にはけがをする。
- 委 員 今は鎌を持ってこいと言っても家にない。そこで高校に勤めている時に学校で鎌を買って、生徒に作業させた。
- 分科会長 雑巾が絞れない。
- 委 員 そう、うまく絞れない。「家に雑巾がないの？」と聞くと、タオル雑巾しかないと言う。
- 委 員 どのあたりまでそれを教えておく必要があるのか、無いのか。そのあたりは難しいところです。生活様式の変化から、家の中で自分達ができる仕事が無くなってきている。家の中で協働して何かをするということ、自分達の分担が無くなってきている。それをどのあたりでさせるのが良いのか。細かいところから、小学校くらいならこのあたりまでさせないいけないとか、昔は雑巾で絞って拭いてからでないと学校に行けなかった。決まっていて、それをしないと学校に行けなかった。

- 分科会長 授業が終わったら廊下の雑巾がけを毎日していた。
- 委員 子どもと年寄りの役割が無くなってしまった。逆に子ども達にすれば、誉められる機会もない。
- 分科会長 何かの時に、ちょっと誉めてあげることが大事。
- 委員 動機付けにもなります。
- 分科会長 5日間の職業体験の帰りによくやったなと誉めてあげる。それがやっぱり良いみたいです。
- 委員 学校に勤めていると、どうしても怒ったりするのが得意になってくるが、誉めるということを忘れる。大事なことだが。昔の人は8割誉めて2割けなせと言っていたが、2割も誉めていない。けなしてばかりで、掃除しない者を怒っている。
- 分科会長 はじめて職場、個人商店などに行って、終わった時に「ご苦労さん」というのを言ってくれる。すごく良い。子どもにとって大変意義がある。
- 委員 先程もあったが、掃除からさせるということは、まだ必要なのです。
- 分科会長 それは、4日目、5日目になると自らやるというところもある。預かってくださった方の指導もあったんだと思うのですが、自らやるようになったと感心されていました。ちょっと誉めてやると変わる。
- 委員 大変変わると思ったのは、神奈川県横須賀の自衛隊の養成所に見学に行った。1ヵ月して家にはじめて帰った子が、親がびっくりした。まず挨拶する、布団はきちんと畳む。うちの子かと思うくらいの変化をする。子ども達は指導によって大きく変わると思う。
- 委員 貴重な体験をしてきて、やりっ放しでなく、それを学校が受け止めてどういう具合に日々の学習の中に生かしていくかという、教師自身がきちんと捉えないといけない。
- 分科会長 せっかく良いのをこれからどうするのか、次のテーマとして探していかなければならない。
- 委員 安部総理が教育を再生すると言っておられる。再生というのはどこに戻

すのか。基準がないといけない。寺子屋に戻すのか、モデルが必要。

- 分科会長 近江八幡市の例では、子どもが主体的に発表会をすると、全然違います。驚いたのは、同じ学年に説明するのではなく、下級生も含めて説明をするのですが、説明が終わって、質問はありませんかとなった時、質問が何も出なかったのですが、そうしたら発表した子が教壇を降りていって、「今の聞いてどう思う。」と聞いた。ここまで成長するかなと思いました。自分達が5日間やったという自信があるから、何か感想があるだろう、コメントがあるだろうと迫ることが出来る。5日間でこんなに変わるものかと思いました。

先生が次に、それをその子の学校の学びにプラスになるように、どう受け止めるかということが、課題になっていくだろうと思います。

- 委員 小中高の縦の連携をどうするかということがいつもテーマに出るが、なかなかクリアにならない。

高校の子ども達が中学校に入ってきて、高校でこんなことを学んで、こういう体験、インターンシップを経て、こういうふうなことをしたいんだということを、中学校の子ども達に伝える。

中学校の子ども達は小学校に行って、僕達はこんなことをして、すごく楽しかった、君達も頑張れというような、縦の流れを作っていきたいとおっしゃるが、なかなか連携がうまくいっていないところがある。

- 分科会長 発達段階に応じて、小学校は小学校でやりました、中学校は中学校でやりました、そうしたら高校は高校でやりますではなくて、それぞれのところで体験したことを、どういうふうに繋いでいくか、連続性というのをどう見ていくか、そういう機会をどういうふうに与えていくかということ、そのあたりが一つのテーマかなと思います。

- 委員 受け入れてくれている側も、非常に協力的なところは、今日は小学生が来る、中学生も来る、高校生も来るということで、錯綜してくる。最近、職場体験は人気ですのでそういう状況もあると聞きます。

- 委員 高校生、中学生を同じ職場に入れて体験させるということはどうですか。

- 委員 まだ、受け入れる側も試行錯誤しながら、受け入れてもらっているのが現実かなと思います。

- 分科会長 小学生と中学生と一緒に受けてもらえませんかと一度投げかけてみたんですが、それは出来ませんと言われました。

キャリア教育を推進していくには、受け入れる側も送り出す側も一緒に

なって、何が目的でどうしようとしているのか、話し合いの場を持たないと、受け入れ側に丸投げみたいにお願いしますということはいかないでしょうし、受け入れ側にすればどこまで準備してくるのかということもあります。ようやく地域と企業と学校と家庭がこれをきっかけに、繋がりが始まったと思うのですが、それがどういう目的で、お互いがその目的を共有して、「では次どうしましょうか。」というような、段階にまでもっていかないと。

○ 委員 今回5日制のキャリアスタートで、商工会議所でやっていますが、ある先生から「何百人の生徒を集めて送り出すのは大変です。商工会議所はこういう企業に行ってくださいと紹介してくださいよ。」と言われましたが、それは出来ません。無責任には出来ない。紹介はしますが、やはり先生が心を込めて子ども達をよろしくお願ひしますと言ってもらわないとという部分が必要で、企業側と先生方のご苦勞は大変だが、企業側も来てもらわなかったら、その方が楽だという思いはあるので、そのあたりをお互いどう理解し合うかというところが、ものすごく難しいです。

○ 委員 受け入れる方も大変ですね。

○ 委員 大変です。

○ 委員 5日間というと、ワンスパンですので、本当にご迷惑をお掛けするという気持ちで送り出しているの、その成果はきちんと目に見える形で出さないと申し訳ないと思っています。

○ 委員 いろんな会社があるので、なかなか揃いませんね。

○ 分科会長 会社の方から「先生も忙しいので、電話一本で良いですよ。」みたいな会社もあれば、校長が最初と途中と最後にきちんと行って見ておられる会社もあるし、いろいろです。

いろいろ話題を出していただきましたが、当たり前のことですが、生きるということは働くということで、働くということを子ども達の中にきちんと育て欲しいという願ひがあって、それをやっていくのにいろんなやり方がありますが、一つがこの体験学習。この体験学習というのは、地域と企業と学校と家庭とを繋ぐきっかけ、そういう繋がりの中から学ぶというそういう仕掛けも一つ要る。そこから始まっていく、ようやくそれが始まったところだと思います。あとは子どもの発達に合わせて、それをどう位置付けていくのか。幼稚園から始まって、小学校、中学校、高校、大学も含めて、その連続性、系統性をこれからどうしていくのかということがあてでしょう。体験についても体験の本質、本当は何をきちんとやらせれ

ばいいのか、考えないといけない。

それを踏まえて、実際にやるところでそういうものが学校教育の中で子ども達の学びにフィードバックしていくことも大事なことだし、学校そのものが、体験にどう関わるかということを真剣に、体験の次のステップを考えていくことが出来れば、もう少し議論が深まると何かの形で全体会に提言出来るかなというのが私の感想です。他に足りないポイントがあれば。

○ 委員 キャリア教育を受ける子ども達の側からすれば、もう少し将来が見えてくるとか、あるいはそこに楽しみが感じられるとか、何かそういうものが与えられたらいいと思います。楽しみなり、明るさなり、夢なりが、受ける側からすればそういうものが与えられるようなキャリア教育であればいいと思う。仕掛け、仕掛けでいくが何のために仕掛けるかといえ、子どものためであろう。

○ 委員 集団の中の役割分担というような体験も大事かと思います。
一昨年、上海の教育事情を視察した時、先進的な幼稚園に行きました。上海も少子化で子ども達が非常に我が儘になっていて、先生の言うことを聞かない。そこで、日本と違うのは幼稚園に軍事訓練をさせるべく1週間、子ども用の衣装を作って、隊列を組んで行進させて、同じ時間に起きて、そして生活をさせるということを1週間させるという幼稚園があって、驚きました。でも、そうすることによって、子ども達が人の言うこと聞く、指示に従うことの大切さ、お互いに連携しながら一つのことを達成していく大切さを、何も言わなくても学んでいくと言われた。行進は今は運動会でも教えない。

○ 委員 昔は運動会というと、行進ばかりやらされた。揃わないので何度でも練習させられたという思い出しかない。

○ 委員 手を肩の高さまで上げて歩けと言われて、格好悪いと思ったが、横から見るとぴしっと揃っていると格好いいんです。

○ 委員 右を見たり、左を見たりして、あるいはコーナーでは左右を見てやらないといけないとかがあるが、今は、歩けない。

たまたまオペラ体験という授業をしてもらったが、何をするのかなと思ったら、子ども達を歩かせるのです。2拍子のリズムとか3拍子のリズムで歩かせる。2拍子は歩けるが、3拍子は歩けない。小学校の4年生でも、5年生でも。自分の中でリズムを取ってとかが出来ない。音は流れていても自分でリズムを取って歩くことが出来ない。

○ 委員 訓練という捉え方をしている。教育というより訓練なので、面白いもの

でもない。

- 委 員 社会に出たら否応なくチームプレーで動かないと、「自分がしたいことをしているんだ、他の人は勝手にやったらいい」みたいなことをしていれば、後工程と前工程が無茶苦茶になって、出来る製品も出来なくなるので、それはきちんとしたルールの中でやっていかないといけないというのは、仕事ですから。これを子ども達に醸成しようと思えば、自分一人の勝手な行動が全員に迷惑をかけるという連帯責任の意識がないと、何をしても何で悪いのか、誰にも迷惑かけていないではないかとかと言うが、そうしていること自体が迷惑なんだということが何故意識出来ないかということを使う。

究極のキャリア教育は、全員1年なり合宿させて集団生活させることを義務教育化して、否が応でもさせてしまうと、ある程度インパクトがあると思う。予算や受け入れ施設の問題で難しいのかもしれないが、そうすればキャンプも出来るし。

- 分科会長 滋賀県では小学校5年生でうみの子に乗り、中学校2年生で地域体験をしているので、それをうまく繋いでいく枠組みづくりをやっていくこと。

- 委 員 さらに、学年の枠を越えて、そういう集団の中で何かをさせるということが必要。

- 委 員 小学校3・4・5、中学校1・2・3、高校の1・2・3で、キャリア教育科のようなもので、子どものキャリア教育が進んできているということをお伝えられるようなものがあるといい。

- 委 員 健康記録のようなものですね。カルテですね。

- 分科会長 それは具体的ないい提案ですね。ありがとうございました。

第3回滋賀の教育協議会議事録（分科会：良識の再構築）

1 開催日時・場所

平成18年11月13日（月）午後2時15分～午後3時40分

滋賀県庁本館2階 滋賀県議会第4委員会室（大津市京町四丁目1番1号）

2 出席委員（五十音順、敬称略）

栗林茂委員、清水慶子委員、住岡英毅委員（会長）、眞壁清治委員、山田昇委員、

3 分科会議の概要

- 分科会長 だんだん議論しているうちに難しい分科会にあたってしまったが、大事な問題であることには間違いない。どうやってやりますか。
- 委員 一つ質問があるのですが。この問題の柱の視点を見た時に、今日の方角性を見ると「滋賀の学校教育の在り方」という方向で進めていますね。そうすると、人材育成、ここに必要な規範意識、良識的な面、畏敬の念を育てるのに、学校教育だけで覆いきれるのかという問題。逆に言うと学校教育が出来ることだけしていくのか、家庭教育に啓発を発信するのか、経済団体にドッキングしていくのかそのあたりが気になりまして。特にこのテーマは対象が0歳児から3歳児なのか、就学前なのか、小中学校の義務教育なのかとか、この問題をいただいた時に結構頭に響いたのです。それが、学校教育の在り方になっていましたので。
- 分科会長 今の点について、では私の考え方を。この協議会のテーマそのものの主発点が学校教育の在り方で、1回目から、趣旨説明からして「滋賀の学校教育」、その流れの中にこれはある。だから、学校教育の在り方を考える6つの柱がこの中にある、これがまず一つ。

しかしながら、これからの学校教育を考える時に、個々の閉じられた学校教育という系の中だけで考えられる問題というのは、教科の指導とか、基礎学力の定着ということが固有の領域であって、大きく人間形成に関わっていく学校教育というのはそういう観点ではもう駄目だと思います。

そうすると、学校教育とは広く家庭あるいは地域、いろんなものとの関連の中で動いていくんだという視点を持つべきだと思います。そういうふう考えていくことによって、やはり滋賀の学校教育の在り方の追求になる、そういうふうには捉えないといけない。

例えば、学校の道德教育をどうするか、学校のあるいは授業にというような、そういう話にはいけない方がいいと思う。おっしゃる意図もそうだと思う。だから、私の言う「中範囲」というのはそういうことで、そこから如何に地域と関わる学校の在り方がどうなるこうなるかと、だんだんな

っていくといいと思うんですが。いかがなものでしょうかね。

- 委員 問題からそれるんですが、これを割り当てられた時に「良識の再構築」とは別の言葉で言い換えれば何かといえば「全人教育」と考えました。

あとは、学校で最近いろいろ起きているいじめの問題、あるいは学校の先生の指導力の問題。

そういったものと、今日の話の中で子どもの声に寄り添う教育の考え方、いじめなどの問題などがあったのですが、受益者の方から考えていくことを考えました。受益者の側から教育の在り方、教員のレベルアップをどこか頭の隅に置いて考えていかないと、特に良識について考えるのは難しいし、そのスタンスで考えないと、特に、「良識の再構築」は難しいと思います。

- 分科会長 そうですね。言葉が適切に表現されていない面があるかも知れない。とりあえず「良識の再構築」という言葉になっていますが、言いたいのは、これまでやってきた教育、教育は戦後、割と個人に焦点を当てて、そして、一人ひとりの人間の形成、あるいは個性というのは随分言ってきた。だが、社会に目を向けていくことを教育の側からしっかりやったかどうかには私は反省点があると思う。いわゆる「社会的に生きている個人」に向けないと具合が悪い。そうすると、社会の一つの規範だとか、それこそ社会にもいろいろあるし、郷土もあるだろうし、国もあるだろうし、国になれば国を愛するという問題にもなってくる。

それと、他者との関係の中でものを考えるという、これは規範の最たる世界であります。そういうことの一番下の項目が受益者側という話。教育は全部受益者側から見ないといけないが、ここはかなり教育する側がきちんとしなければならない問題だと思う。そんな感じがしております。やはりあまりにも「社会というものをあまり意識しない人間」が育って来たら困ると思う。付随的には宗教的情操だとかいろいろが絡んでくる。私は漠然とこういう感じを持っている。

- 委員 よく分かります。昔は「集団で教える」でした。組織の中で一人ひとりを集団の中で教えました。戦後、個を強調されるあまりに学校も分散して個別指導で手が一杯で、個別プログラムを組んでやってきました。

今、教師の授業力が落ちている面が言われる。また、規範意識のない子が増えたと言われるが、何をもってそう言うのか。9割以上はだいたいはいうまくいっていると私は思う。一部の子どもに対して言っている言葉、一部の教師に対しておっしゃっている言葉であるのではないかという気がする。このあたりの定義付け、実態とか原因とか、本当なのかどうかという、そこが大事だと思います。

○ 分科会長 本当かどうかというところはきちんとしないといけない。

○ 委員 最初の理論、実践をどこに置くかで変わってくると思う。元になるところ、足場をしっかりしないと話を構築出来ないのではないかという気がしましてね。

○ 分科会長 「良識の再構築」という名前にしておりますが、中範囲でいえば「社会の中の個人」というふうなことですよね。それを一般的には我々が議論し始めると、こんなものが子どもも先生も変になっているとか、こんなところが落ちているとか、マスメディアも報道しますけれども、それがどれくらいのものに基づき、どれだけの証拠をもって言っているかがあまりされていない。だから、現実をどれくらいに把握するかというのは議論の中でやっておく必要があるね。

○ 委員 私にも小学生の子どもがいるのですが、先程も言われましたが先生も9割の方が一生懸命されています。もっと多くかも知れませんが。ただ、先生も一部の先生が子どもに依怙贔屓をする。それがまわりまわってPTAの声に入ってきます。その先生に私の子どもが習ったことがあるが、あまりにもひどくてそれまでは家内がその先生に言っていたのですが、それでもひどくて子どもが何とかしてというので校長にも話しました。

今、教育委員会や文科省も、学校は企業、校長は社長と言われますが、一般企業では駄目な社員は切りますが、校長にはそこまでの権限はないのです。市町村教育委員会でも出来ないんです。そのあたりでの権限の委託、それも学校教育の在り方の根本だと思う。

一部の先生がそのように依怙贔屓されていると、やはり子どもたちはそこで全員が、クラス一つがそういうふうになってくる。逆に、ものすごく怖いけれど信頼出来る先生ですと全員がその先生についていく。そういう形の学校教育の在り方。

それともう一つ、学校評議員制度がありますが、あれは何されているのか。話を聞いてみると、学校側からの説明を受けるだけです。それだと意味がない。評議員は学校とは別に、平日、授業をまわって先生がどういう授業をされているのか、この先生がどういうことをされているかを確認して、それで学校側と対等に話をしないと。有償か無償かは知らないが、税金の無駄使いになる。そのあたりも学校制度の在り方として変えていかないと駄目だと思う。

それからもう一つ、特区制度。あれを立ち上げるとするならば、滋賀県としてされるのかどうかを県教育委員会の方にお尋ねしたい。考えても、ただ単に上からの意見だけを伺うだけで何も実施出来ないのであれば何も意味はないと思います。

- 分科会長 今おっしゃったことは直接にこの分科会のテーマではありませんけれども、要するに、この協議会でやったことをどう生かして、どう反映するかに極めて密接に関わってきますので、どこかの段階できちんとしたいと私も思うのです。そうでないと我々は何をやったのかということになってしまう。そこは、最初から私も申し上げているように、気合いを入れて作ろうと取りかかっていますので、どこかできちんとしたいと思っています。

ただ、部分的なことで少し誤解があるのは、評議員は制度的には諮問機関で、意見を聞く機関で、制度的に対等な関係ではありません。対等な関係を持ちながら今後、学校というものをみんなで運営していこうとするのに、もう一つ別の「コミュニティースクール」という制度があり、これは「学校運営協議会」というのですが、これには法的根拠があり、ある程度人事にも意見を言えて、そして特別職の公務員という身分が与えられ、守秘義務もあり、しかしながら、大いにやるというのが、別個にあるのです。だけど、それは多くの学校がまだそういうシステムをとっていない。これからです。学校評議員制度はそういう主旨で設けているので、仕方がないです。

- 委員 上からの、文科省からの制度ということですね。

- 事務局 学校評議員制度は、校長が委員の方に意見をお聞きするという機関で、直接個人に直接話をしてもいいし、会を持ってもいいし、校長の応援団みたいなものです。

- 委員 学校評議員制度は、全般的な話で学校でこういうことをするというように、一方的に聞いているだけで、権限がないんですね。

- 事務局 学校評議員制度で権限があるのは学校で、新しい制度のコミュニティースクールには権限があります。

- 分科会長 これと関わって一つ、疑問、先に共通項を作っておきましょう。その「良識の構築」でどういうことを考えるとかいうことを。

- 委員 どのようなポイントで「良識の再構築」を進めていけばよいかを考えた時、子ども自らが社会参加出来る喜びが味わえているのか、そういう機会が与えられているのかをもう少し考えておくことが大事なかなと思ったんです。自由な社会が進んできて個人が自由を謳歌出来る、そういう生活が出来ることは幸せなことです。

ですが、仲間とともに集団を作り、生活し、喜びを味わえるように子ども自らに力をつけていくことが必要と考えます。仲間とともに協力する中から、将来の社会で組織の一員としてどのように行動すればよいか分

ってくる。

また、組織と組織が結束すれば、地域の団結力、社会の力に繋がっていくので、仲間とともに関われるような体験を、子ども達に、その発達に応じてさせていくことが大事だと思います。つまり一言で言えば、社会参加と喜びが体得出来るようなシステムを、今以上に視点を明らかにしながら取り組んでいくことが大事だと思います。

- 分科会長 それではこれから自由な発言をしていただくことにして、まずここでは、A・B・Cの3つに発言の内容レベルを分けて考えてみましょう。

Aはかなり上位の理念、私が先程から申し上げているレベルの話。Aレベルは理念的な「社会の中の個人」といったような大きな問題。

また、今、委員がおっしゃったのはかなり具体的なレベルの話で、こういうことをやることによってとか、人との関わりで自分が何をすべきかなど、中レベルのBとも言えるしCとも言えるのですが、仮に、その話をCの具体的な話とおいた場合、どうしてもすべてを学校教育でやれと持っていくと、どんどんと学校の仕事が追加されていくんです。そういう議論ではなくて、地域や家庭との関係の中で、これからの学校教育がどうしていくか、どう取りさばくかという話にいずれは行くだろうけれど、とりあえずCとしましょう。

それから、指導者の方が襟を正さなければ言えない面がありますが、しかし、先程の委員の話によると9割は大丈夫だということなので、その話はかなり中範囲の話でありますので、Bの中範囲の話にしておきましょう。

このA・B・Cをどこからでも最初、自由に話してもらえればよいのではないのでしょうか。

- 委 員 今の話は「地域独自の教育システムの構築」ということになるのでしょうか。

- 分科会長 今はこの分科会で扱っているが、最後は、次回、その次くらいはそちらの「地域独自の教育システムの構築」に振れという調整になってくると思います。

- 委 員 学校教育の中の問題を、地域にも家庭にもどのように伝えていくことになるとか。

- 分科会長 それから地域にどう働きかけるか、家庭にどう働きかけていくか。地域社会と一緒に作っていく、そういう学校の在り方とか、ということになるのかな。

- 委 員 まちづくりへの参画とか、あるいはまちづくりにおける子どもの出番と

か、それが如何に現実社会の中にあるかということに目を向けた時に、30年、20年前に比べますと今は減っているように思えます。

昔は青年団などがあったりして、そこで子どもの年齢が一定に達したらそこに参加して行って地域で仲間作りをしながら、また社会の仕組み、しきたりを自然に学んで行ってといった地域のシステムがありましたが、それが薄れている中で、子どもがいきなり成人したから社会の中に参画をと言われても、もう個人は自由な社会の生活に向いていて、なかなか地元、自分の住んでいるまちづくりに参画しないという現実がある。

個人が幼い時から地道に子ども会活動に参加する、中学生は地域行事に参加していくなど、子どもの出番を作っていくことは大事と思っています。

- 分科会長 確かにそうだと思います。今、地域が衰退しているのです。この話を押し詰めていくと、一方では、家庭も地域も教育力を持っていないので学校が引き受けてやらねばということになると、すべて学校へ行ってしまう。これでいくと学校の役割がどんどんと付け加わってくる。

それともう一方は、家庭、地域の弱っているものを再生しようという方向、復活しようという方向がある。そのために学校に家庭や地域からものを申すという方向があるが、こっちで行かねばならないと思う。そうしないと今はもう家庭も地域も駄目なんだから。今の教育は学校に何でも放り投げる、やらなければ先生は何をしているということになる。これを行っている限りどうにもならない。

今の話は一つの大きな問題。徳目だけ「社会の中の個人」といったところで育つわけではない、具体的な何かに参加しながら、考えながら、目覚めていくわけだからそれをやらねばならないですね。

- 委員 一つの例ですが、昨年12月に草津に平和祈念のモニュメントが出来た時、公園に設置しよう、式典をしようということになり、行政の方も参加され、モニュメント制作者以外に、子どもを呼ぶことになりました。そこで平和の大切さを聞き、その後、園児は「世界中の子どもたち」という歌を歌い、小学生は祈りを込めて折り鶴を捧げたんです。平和な社会は大事だという気持ちが、子どもも大人も喜び合う場が生まれました。何もない公園が平和を祈る拠点になったことで、その後その前を通りかかる時、その時の思いを思い抱くことが出来るようになったんです。

地域ぐるみの取り組みは世代を越えて、地域を思う気持ちが育まれ、関係する機会が出来ました。

- 分科会長 学校がコーディネーターになれますか。連携のコーディネーターに学校がなれるのか。このような取り組みで学校がリーダーシップが取れるか。目覚めさせるという意味で。盛んな地域は既に出来ている。出来ないところは出来ていない。出来ていないところは学校がプロだから学校の在り方

と大きく関わってくる。さすがに実践のただ中におられるだけあって、極めて具体的な話でした。Bの領域の中での具体的なお話もしてください。

- 委員 日本人に規範意識がなくなってきた原因、何故家庭が崩れ、規範意識がなくなってきたのか。戦後教育の中では、あまりにも集団を優先したらまずいという教育で、個人が優先されてきた。

それと、脳科学から行くとゲーム機で、テレビ、ビデオで脳の前頭前野が育っていない。それで子どもが切れる、我慢出来ない、幼なくなっていると言われておりますが、その原因は何かという原因分析が要ります。

- 分科会長 要と思う。

- 委員 そうすると何が必要なのかが逆に生まれてくると思います。

- 分科会長 その前に、委員が言われたのはそもそも規範意識が崩れているのかどうかということでしたが、そこはどうですか。崩れてないなら原因分析の必要はないのだから。

- 委員 いわゆる核家族によって、三世代同居の中から教えられたものが、伝統的なものが伝わっていないかもしれない。もったいないとか、いろんなことをお祖父さん、お祖母さんから伝えられた。その言葉が伝わっていないと思います。

先日、教師が子どもの家に掃除に行ったんですが、掃除のやり方にその家の文化がないんです。先生が整理して、シールを作って、そういうことを教えるんです。洗濯や整理の仕方が分からないんです。先生が掃除の仕方を教えて、そこまでしている。今、そこまで関わらねばならない子がごく一部ですがいるのです。

- 分科会長 その場合、多くの家庭はそうではないですよ。特殊な場合ですよ。

- 委員 そうですね、私の学校ではほとんどはそうではないです。でも5、6人学校にいと目立ちます。

- 委員 給食費を払わず、携帯電話に6万円を使うということも聞く。規範意識は悪くなったと思う。全体的に見れば15歳以下の子どもの重大殺人事件は増えているのは、規範意識が薄くなっているのかな。

- 分科会長 何か、規範に関わって「毅然たる態度」が社会全体になくなっているのではないか。例えば、携帯電話は持ってるが給食費は払わないというのがあったが、「おかしい」と毅然と言うべきでしょう。一方ではそれがまか

り通っている。ある意味で、規範、良識を巡って、教える側の毅然たる態度がものすごく弱くなってる。私も含めて、学生に言いにくい。

例えば、私がエレベータから下りかけたがなかなか降りにくい。「ちょっと待て、あなたのやっていることはおかしい。」と言ってない。そんなことを言うことは少ないので、それでどんどんそういうふうになってくる。また、私がドアを開けた時、学生がどんどん出てきて止まらない。ずっと私がドアを持っている。誰かが「先生、先にどうぞ。」というのが普通でしょう。その私の光景を見て、ある人が「先生、注意しないといけないよ。」と言われ、「すいません。」と言いました。そういうものがはびこっている。

だから、やはり学校教育でも家庭でも言うべき規範はきちんと言う。その代わり自分も規範を守らないといけないので厳しくなるが、そのところが甘い。

○ 委員 夜回り先生が脚光を浴びるのはそういうところかな。ぼしっと言いますからね。

○ 分科会長 言うためには日頃からの人間関係もないといけない。その構築を学校からやらないと駄目かな。今はそれしか方法はない。家庭から、私たちの下の親の世代の再教育は不可能だと思う。学校、家庭でも言うべきことは言う。

○ 委員 学校から言えればいいが、今は一言言えば他のことには協力しないと反発してくる親が多い。自分の子どもだけは大事にしている親が多い。だが、学校からそういう意見を言う必要があるはずだ。そのあたりをきちんと学校が、先生方が言える状況が作ればいいが。だが、それが見えない。家庭の方からは駄目で、先生方から言える状況をつくる必要があるだろう。しかし、それが難しい。

○ 分科会長 そのためにはまず家庭、地域から支持されないとね。

○ 委員 支持するにしても、今、校長はだいたい2年か3年で代わられます。

○ 委員 そのバックボーンに戦前はもちろん教育勅語というのがあったんですが、もっと平たく言えば家訓、社訓とか、もちろん学校には校風があって、社会の中に規範意識の柱があったが、今はなくなっている。だから、道徳教育をやってもいろんな価値観はあっても、そのもう一つ裏の「規範意識のバックボーン（骨組み）」がないから行き場を間違っているのかも。

○ 分科会長 骨組みがね。

- 委 員 そこに日本人、滋賀県、郷土という中に集団が、一つの教育目標を達成していく方向性があるのだろう。だから、ばらばらになってしまったのか、好き勝手しておっしゃるのか。
- 委 員 先程も言われた三世代同居の子どもは全然違います。お祖父ちゃん、お祖母ちゃんがいる家庭の子は考え方がやさしい。ただ、今更、核家族と一緒に住めとは言えない。それをするにはやはり学校側から地域に投げかけないと。
- 分科会長 投げかけないといけない。
- 委 員 例えば、交通安全でみんなで事故のないように啓発して、全保護者が飛び出しは危ないよと認識していても、歩道を歩きましょうと頭で分かっている、子どもがジグザグに歩いているのを保護者が容認している姿があります。カーブで車がキキと止まって保護者が運転手に謝っているんですが、謝る以前に子どもに教育出来る親子関係でありたいんですね。学校も「危ない、何をしているんですか。」と黙っていずに、繰り返し、保護者に啓発していくことが必要なんですね。あるべき姿をきちんと教えていける姿に戻っていくことなんでしょう。
- 分科会長 そこからなんでしょうね。
- 委 員 学校から帰っていく時、子どもが信号を待っている時赤信号でも渡っている大人がいるし、よく見ますね。
- 委 員 今の教育の中でも、小中連携や保幼小中等の連携というけれども、中高一貫は今、学力やカリキュラムで取り組んでいるんです。保幼小中連携は、人間の生きる規範意識のことで連携すべきではないかと思うんです。
例えば、挨拶が出来たり、我慢の出来る子を作ろうじゃないかと。15年間で作ることは出来るはず。それが保幼小中の一貫教育でないかと私は考えるんです。先程のバックボーンを考えると保幼小中一貫教育で抜本的な提言が出せればと思う。
- 分科会長 今の保・幼・小・中等の連携をやかましく言っているが、あの取り組みは、こういう規範とかを巡ってよりも学習内容の接続みたいところで言っている。それも大事なところだが、規範というものを巡ってあまりやっていないな。そのような気がする。
- 委 員 命を大切にする気持ちを育む教育を、保幼小中でどう一貫した取り組みにするかで突っ込んだ議論をしていない。参加者もそれぞれの現場の実践

を語ります。

例えば、幼稚園児が命を大切にするとする時、ダンゴムシを空き箱で見つけてダンゴムシの家を造っている。その中は、家と家とを結ぶ道があって、ダンゴムシが死なないように、信号、横断歩道を作り、幼児なりに安全を考えて遊びの中でダンゴムシタウンを作っています。そういう経験を積み重ねながら、現実には園庭に出た時といてには、ダンゴムシを踏んではいけない、生きてるんだとやっている。

それが小学校にどのように繋がっていくかを願って、小学校の先生にもその実践を聞いてもらっている訳なんです、小学校にも命の大切さを小さい時からやっていることを受け継いでいって欲しい。その部分を、校種間でどう継続していくかが大事です。

- 分科会長 継続していかないと意味がないです。規範とか社会の中で自分の行動が弱まっている。9割は大丈夫というかも知れないが、全体的に規範意識が弱まってきている。
- 委員 程度は違うけれども、9割の中にも自分の弱さを持っていることが考えられる。
- 分科会長 藤原正彦さんに言わせれば、最悪の状況だな。
- 委員 最悪でしょうね。連鎖なのか知れないけれど、命を絶つ子が毎日のように出ている。死ぬくらいなら何でも出来るだろう、いじめられた相手にぶつかっていけるはずだろうと思えるんだけど、気持ちの弱さか、はやり流されていってしまうのか。
- 分科会長 それと、社会というものが念頭にないからいじめ方も度を超して滅茶苦茶になってきている。
- 委員 昔みたいにからっとしたいじめではなくて、ねちねちとなっている。
- 分科会長 あるところでやめるとかね。これをどうやって立て直すかだろう。
- 委員 学校からの投げかけが出来るだろうか。いいとは思いますが今の学校に投げかけるとなると、先生は精一杯の授業をして、5人くらいに先生が手を取られるんですね。それらの子がいれば先生は手を取られる。みんなが模範生ではなく、みんなが吠えたとなると、個性があって大変である。
- 分科会長 三者の協議会が要る。学校、家庭、地域の協議会が必要なのかな。こんなことを言っても大抵の先生方は乗ってこないかのしれないが、学校は今

の状況を曝け出してもよいのではないか。先生は多忙な状況で、ものすごいです。言われるその苦情たるや、理不尽なことが一杯あって、苦情の中で仕事をして。すべてを曝け出して、みんなが先生も大変なところにいるということを分かりながら、規範・良識をどうしていったらいいかについて考えていったらいいのかな。腹を割って議論する協議会が要るのかな。

- 委員 授業を受けさせる以前の態度を教師が作らせなければならない。家庭にかなり問題がある。教師が生活のリズム作りをする必要のある子がいる。食べさせないといけない子がいる。そちらに手を取られて今は授業研究も満足に出来ないのが事実。

私は、今、相当いる保護司を幼少期に回す、0歳から小学校までの間に保護司を投入していく、すなわち「国が子どもを預かる」くらいの考えで取り組めば、逆に保護司は要らなくなるのではと考えるのですが。

- 委員 それはそうだと思います。滋賀県ではいろんな塾をやりますが、やんちゃな子どもが来る。家とは全然違い共同生活で、私たちも1週間だからボランティアでいける。でも一週間だけでは元に戻ってしまいます。

これは学校と地域との連携となりますが、先程の幼・小・中・高校の連携が言われますが、高校は難しいが、そういうものに関してボランティアだけでは対応出来ないものがあるので、学区単位で三者懇談会があるが、それではなく学校主体で地域社会とPTAとが混ざって、活動を学校がリードしていく必要がある。親を教育していくとか。今は親の顔が見えませんか。

- 分科会長 まあそうと思いますが、出てこない人を引っ張ってこられるか。きちんとした親を相手にして本気になって広げていく。それしかないかな。

- 委員 さっきの話にもあったが、現実的にそういった声が大きくなってくると9割はちきんとした親です。現状はしたくなくても、この学区で事故、刃物事件があったら、次の日からお父さんもお母さんも、まず9割の親はパトロールに来るはず。そういった集める手だてをいろいろ考えないと。それで親の良識も変わってくるのだろう。

- 委員 良識を教える時間はあるんですか。

- 分科会長 道徳なんだが、そこまでいけるか。

- 委員 現実的には、社会体験とかの中で、人としてのしてはいけないことやルールや公共性を守るとか、こういうことを教える必要がありますね。

- 委員 でも、今、日常的な中でけじめが先生と生徒の間には境目がない。挨拶の仕方とか、そんなことはいけないとか、教えないといけない。8時間一緒におりますから。
- 分科会長 だから、メリハリがいる。おかしいんだと。先の例で言うと、私が先に出ると。大学の例を出したが、けじめがない。仲良くする場はいくらでもある。コンパもあるし。今はいつもコンパみたいなものだ。
- 委員 一番有効なのは部活動なんです。挨拶とか集団できちんとすると、結構出来るんです。日常の場面に来るとちょっとなんです、結構やれるんです。これは唯一救いだと思うんです。
- 委員 その子が体験しているかどうかということなんだ。
- 分科会長 それからCのレベルになるかも知れないが、どの学校も「学校の教育目標」を掲げる。あれには二つの問題があると思う。
一つはあまりにもキャッチフレーズが多すぎる。言うても言わんでもいいことが多い。企業に例を取れば「世界に羽ばたく・・・」と一緒に。これが一つ。これはあってもいいとして、譲るとして。
もう一つは、「元気な子」とかいろいろ言うけど、その目標の中に「社会の中の個人」があまり見えない。これについてはどうですか。管理計画を見ていていかがですか。
- 事務局 管理目標自体が分かりにくいです。最近、教育目標が子どもにも教師にも分かるようにということで、長期的な目標とか、具現化していただいて、目標とかマネジメントに関わって改善しようという意識が出てきています。でも、伝統的に「仲良く、元気よく」とかがありますから、なかなか教育目標は変えにくいと言う校長は多いのが事実です。
- 分科会長 「仲良く、元気よく、逞しく、輝け」とか、ああいうのが多い。
- 委員 ただ、学校教育においては、実践の中にはその崇高な理念は私は必要だと思います。今年は何を子どもに求めるのかを、具体化してやっていく必要がある。
例えば、今年の目標は挨拶出来ればいいのか、今年は環境問題で掃除を頑張ろうとか、1年間の短期目標と、中学だと3年でやりきる中期目標とか。そして、今おっしゃった長期目標、教育理念。最近はこのようになってきます。
だから、課題を明確にして、来年の目標を何にするかを当然、具体的で構造的で見える目標にしなければ。親やPTAにも示していくことが大事

です。学校目標といいますか、「今年の目指す生徒像」という形で今年の取り組みはいこうと、変わってきていると思います。

○ 分科会長 私がさっき言ったのは、例えば挨拶が出来る子にとかに関わるんだけど、普通「仲良く」とかあるが、それが規範に迫るような目標になっているのかどうか、規範的なものがあまりないのではないかな。

○ 委員 「知・徳・体」でいくと、「・・・が出来る子」とかは「徳」でいってるから、どこにでもありますね。

○ 分科会長 そこに挨拶が入るのか。それでいいのか。徳をそこに入れているか。徳ばかり言ってもちょっとげっぷがでるしね。

○ 委員 学校によっては「徳・知・体」とか言ってますね。

○ 分科会長 この前、中国の老年大学に行って4つの言葉を言われた。その校長が4つの校風を教えてくれて、一つは「重徳（じゅうとく）」＝徳を重視する、次に、「博学（はくがく）」＝一杯いろんなことを知っていること、3つ目は「創新（そうしん）」＝新しく作る、要するにクリエイティブということ、それから「和諧（わかい）」とありました。

「和諧」というがよく分からなくて質問したら、人と自然との関わり方が分かる、人と人との関わり方が分かる、人と社会との関わり方が分かること、これでだいたい言い尽くせるけど。

敢えて言うと、もう一つあると言われたのは、自分との関わりが分かるということ。要するに自尊とか自己コントロールとかいう問題だと思う。それらすべての世界の和諧。目標として、校風として、それが書いてある。この中に重徳が入っている。重徳がトップにあった。

もう一つ、この前読んだ本の中に書いてあったが、日本人の勤勉さとか思いやりとかいろんなものを育てたのは、教育基本法でもなければ、いろんな教育改革の成果でもなければ、学習指導要領の成果でもなければ、主には日本文化の中に定着している掃除の習慣だとか、いろいろあるが、掃除を教育の中に取り入れている国は世界でも稀なんです。ああいう自分で綺麗にする日本の習慣や文化が、勤勉さとか人の思いやりや、いろんなものを育てていると書いてあった。集団でする、ああいうものを大事にしない。

○ 委員 10分の掃除で、集中力と思いやりと気配りと、気がつけばいろんなところが拭けるとか、お互いの役割分担を考えると、たった10分でいろんなことが出来るんです。それを言ってるんですよ。これが総合にならないかと自らに課題を課しているんです。おっしゃるとおりで、そこに日本

の文化があるし、人への関わりが出てくるし、自分の行動が分かってくる。
たった10分の掃除の中に大切なことが含まれている。

○ 分科会長 岡本薫さんの本に書いてあったが、結構面白い。だから、そういう気風のみなざる学校文化を創らねばならない。例えば、今、委員の言った10分間、それを積み重ねたら「文化」になる。

○ 委 員 これらもいずれは人作りなので、日本人がどうして育ってきたかを考えてみたら、「伝統文化」で育ってきた。

長浜には長浜祭りというのがあるんですが、あれは人を作ってきたと思います。子ども歌舞伎があり、子どもが人とのマナーを身につけるとか何ヶ月も集中してやるとか、そこは縦社会でいろんな役割があり、日本は伝統文化で人作りしてきたんです。そこには人作りの場があったんです。スポーツにも人作りの場はある。いろんな人作りの場があったと思うんです。その場を活用しない手はない。持っている財産で活用することになる。

○ 分科会長 なかなかいい話です。

○ 委 員 大人から与えられる役割分担。背伸びしてちょっと大人になったような気持ちになって。私も行事を手伝いに行った覚えがある。

○ 委 員 昔は青年団があって、いろいろ教えてもらって。結局、教育がそこにあったんです。

○ 分科会長 やはり、こういう話をしっかりと踏まえて、実践を作っていくって、そして、規範意識なり、郷土愛なり、国を愛する心なりを作っていくかないと。これだけ荒れてるんだから、徳目が出てくるんじゃないか。

○ 委 員 こういうのを進めていくのに、学校の自由選択制というのがありますが、あれはどうですかね。

○ 委 員 あれは無い方がいい。あれでは地域密着でなくなってしまう。

○ 委 員 地域の学校でなくなりますね。長浜でも昔は地域で学校をしたんです。長浜はその機運を起こそうとしているのに、逆なんです。

○ 委 員 地域の方も、自分が学校とか園の教育に関わってきてくださると、子ども自身がかわいいという気持ちが高められるようです。

例えば、畑を年中提供してくださる方がおられて、芋畑の持ち主が植え付けや草ひき、芋掘りの機会に出てきてくださり、園児との触れ合いがあ

り、「誰々ちゃん今日は元気がないね。」とか話してくださったり。地域で出会っても向こうから園児に気配りや声掛けをしてくださったり、自分の孫みたいでうれしいとか言ってくださったり、地域の方が教育に関わっていただくということはすごく大事なことでつくづく思います。

○ 委 員 学校選択制というのは、今の考えとは完全に逆になる。本気で地域でその学校を育てていく、そこで地域同士でその学校を良くしていこうという競争が生まれてきたんです。

○ 委 員 祭りや伝統文化の日には学校は休みにしているのですか。

○ 委 員 長浜市は長浜祭りの時は2時間で、後は社会見学に出るように放課なんです。それも、その2時間は長浜祭の講話を学芸員とか専門の人にしてもらう。長浜では小・中学校だけですが、いつも4月15日にそうしています。昔から、子ども達もたくさん祭に出ますので。

今、旧市街地と新しい団地がたくさんあって、何が起こってきたかという保護者も広域化し、子ども同士も関係が稀薄になってきた。だから、学校の使命は何かというと、この伝統文化を、中学校の先生が何か新しい文化を作るのに参加出来ないかという使命感を構築しているんです。地域によってこういう問題を解決出来ないかと。大人社会や集団社会の中でこのことは学んできたんです。

○ 委 員 子どもは、マナーやルールに関わることを大人と過ごす中で自然に学んできたんですね。

○ 委 員 だから、地域には行事があるんですね。その時に行事への子どもの参加が大事なんです。PTAの広報役には何か仕掛けてくださいと言っているんです。

○ 委 員 子どもが地域で出番を得ることと関連して、例えば、中学校3年生の保育体験がされてますが、中学生や高校生が幼児と触れ合う、そういう機会を増やしていくことが大事だと思っています。

○ 委 員 本当はやりたい。しかし、授業時間確保で時間がなかなか取れないんです。キャリア教育も出てきて、5日間も時間の確保が大変なんです。あれもやれこれもやれと。

○ 委 員 そのあたりの意見を先生方から私は逆に聞きたい。何故出来ないかが今の話を聞いて私は分かりましたが、他の一般のPTAは全く分かりません。もっと大きな声で地域に投げかけてもらわないと分かりません。

- 委 員 なかなか授業中でも規範意識は育たないんですね。
- 分科会長 だから、岡本薫さんも言ってるように「教育追加症候群」、何かあったらからこれを加えていくという話。あれではどうにもならない、これでは学校も動けなくなる。
- 委 員 内容を加えていって、さらに土曜日が休みになって、余計に大変でしょう。
- 分科会長 学校教育の在り方について、さっき言ったように地域や家庭の中での追求をしないといけない。これは確認しておかないと。
- 委 員 授業の確保については文科省からですか、これだけを確実にしなさいと言われるのですね。
- 分科会長 これまで、文科省は教育追加症候群でやってきたんです。それをやれるような条件整備をあまりしないにも関わらず。
- 委 員 ゆとり教育はどこに行ったのかというのは、全く分からないんですが。
- 分科会長 やっているんですが、条件整備をあまりしないものだから、現場は右往左往しなければいけない訳です。未履修問題でも「授業時間を確保しなかったらおかしい」とだけ言っておけばいいものだから、楽なものですよ。
- 委 員 何かあったら各教育委員会に調べろ、上に上げてこいでしょう。
- 分科会長 高校の未履修は全国的な問題じゃないですか。ただ単なる規範意識の問題ではない。入試とか何か様々な構造的な問題がある。この構造的問題には大学も文科省も責任の一端がある。国立大学協会もものをいって構造を変えるようにしないといけない。構造を変えることを何もしないで、それを何も言わずに校長は何をしていたんだと責めるだけだからこうなる。大学にも責任はあると思います。入学しやすいように受験科目を減らしたら高校もそうになってしまう。
- 委 員 受験をするから、子どもも親もそうなりますね。
- 分科会長 だから、極めて大きな構造的な問題なので、ここでは扱えないなど、私はそう思ったんです。

- 委員 今、教育でも、経済界でいう顧客ニーズに沿ってとか言われるが、教育はそれでいいのかと振り返る必要がある。人作りは「強制」だと私は思う。それを要望しないから育たない。教育も人作りもには「強制」が必要。人作りはもういいから学力だけつけろ、実技はいいから5教科だけやれとなるのは困る。子どもに対して、あなたが望むと望まざるとに関わらずこれだけはやるということを大人が言わねばならない。厳然とこれは言わねばならない。今、社会が子どもをコントロール出来ないようになってしまっていることが問題だ。
- 分科会長 さっきの毅然たる態度が必要だ。
- 委員 コントロールするとすぐに切れる子どもがいる。
- 委員 切れる子には我慢出来ない子が多い。我慢出来ない子はどこから来るのか。生活の中からくるのか脳科学からくるのか、どちらに問題があるのでしょうか。
- 分科会長 どっちもからだろう。
- 委員 その改善に向けて、学校教育から発信していかなければならないということになる。
- 分科会長 脳科学とか医者とか、いろんなものもチームを組んで。しかし、親が理不尽なことを言うのは何とかならないものか。あれでみんな腰が引けてしまう。
- 委員 特に義務教育ではそうである。高校では停学・退学が出来るが義務教育では出来ないでしょう。義務教育はそこがネックになっている。子どもが言うことを聞かなくても、義務教育では退学とは言えないでしょう。
- 分科会長 報告しなければならないので構造的にまとめてみます。時間が迫ってきましたので、間違っているところは間違っていると言ってください。
まず、これまでの議論を踏まえていくと、「良識の再構築」というのは、
①「社会の中で個人である。」。だから、個性も大事だが同時に社会的に生きていく個人でなければならない。そこに規範があったり、あるいは、宗教があったり、先祖を大事にするなど、それも全部含んでいる。そういうものを受け継いで大事にしていく。「良識の再構築」といっているが言いたいのはそういうところにある。そこを押さえておく必要がある。
②同時に、本当にそれが崩れているのか、再構築とは今が駄目ということが前提にあるからだが、何をもってそう言うのか。全部が滅茶苦茶にな

っているとは思えないが、家庭、社会が崩壊しているのか、本当に再構築が必要なのかを考える必要はある。一部に突出した乱れが見られ、ある意味で全体にも広がっているのは確かだ。程度の問題はあるが、「弱くなっていることは確かである。」ことを我々は共通理解しなければならない。

③その場合に考えないといけないことは、大人の側、社会、教育する側が、毅然としないといけない。いい加減だということ、私も反省しなければならない。教育に携わる者は毅然とした態度を持つことが必要だ。教育には「強制」という側面が必要で、それなしには教育はあり得ない。ここを作っていないといけない。だから、学校や社会に「規範の柱」がきちんとあるように、そういうものを作らねば。これはひとえに学校だけではなくて家庭、社会にも広がっていくような話なので、そういうところにしっかり問題提起したり、話をしたり、共通理解したり、粘り強く作っていく。

④それは言葉を換えて言うと、「学校の文化あるいは習慣」である。粘り強く継続して作っていくことが大事だし、これまで地域の伝統文化、社会性や規範を作ってきた、そういうものを継続して、大事にしていくことが必要だ。地域の伝統文化やスポーツを学校教育で活用し、大切にし、協力する。地域の中での学校教育を規範というものから見るのが大事だという話が出ていた。

⑤それまでは中範囲の話だが、具体的には保幼小中の一貫で「規範」の面からも連携を作るべきだとか、子どもの社会参加、子どもの出番を作っていくとか、保護司をもっと小さい時から導入すべきであるなど、具体のCのレベルの話が出ていました。

だいたい今日はこれくらいの所ですかね。何かお気づきの点はありましたか。今の中で一番大事なのはどれでしょうか。

- 委員 「強制」という言葉をあまり強く出すのはどうでしょうか。
- 委員 言葉としては一般受けしにくい。
- 委員 教えなければならないものとか、自らが学ぼうとするものとか。両方あると言うことを。
- 分科会長 そういう言い方をしなければならないか。「強制」は分かりやすいけど、誤解を与えるか。
- 委員 「モデル化」では柔らかすぎるし。
- 分科会長 「強制」とは嫌なものをねじ伏せるような感じか。「毅然たる態度の文化」とそれからさっきの「学校文化の伝統」を作っていくということだな。

- 委 員 そこから郷土愛が生まれるのか。
- 分科会長 郷土愛とか規範とかは、そこから生まれるんだね。郷土愛はもう出来たか。
- 委 員 愛国心ももう一つあがって地球愛になったらいいが。そこがないだけなんです。
- 委 員 人類愛とか。
- 分科会長 私はまた少し異論があって、地球とか世界に解消しすぎだと思います。つまり、地球愛があって個別のものがあると考えるべきです。その個別のものが地球愛と調和を取ることが大事で、これを蹴散らすのではなく、そういうものがあるんだと思う。だから、あまり個別を解消すると極めて漠然としたものになるんじゃないかと私は思うんです。
- 委 員 環境でいうとよく分かる。環境がよければ世界がよい影響を及ぼすというようなことを言ってるんでしょう。先生がおっしゃることは。
- 分科会長 そろそろ行きましょうか。

第3回滋賀の教育協議会議事録（分科会：国際化への対応）

1 開催日時・場所

平成18年11月13日（月）午後2時15分～午後3時40分

滋賀県庁本館2階 滋賀県議会第4委員会室（大津市京町四丁目1番1号）

2 出席委員（五十音順、敬称略）

奥田祐子委員、片岡昌史委員、千原美重子委員（副会長）、山本重夫委員

3 分科会議の概要

○ 分科会長 まず、柱の方で、議論の視点ということで（案）がありまして、国際化の進展への確実な対応ということがあるんですが、本当に日に日に国際化は進んでおり、対応が進まない前にこのような国際化があると思いますし、国際化は英語ではないという視点、多文化共生の観点ということがあげられており、先程、全体会で日本文化の重視という視点もあげられていましたが、古い歴史・文化そういう観点からということで、非常に幅広い観点でありまして、どなたからでも口火を切っていただきますでしょうか。

○ 委員 私からは、国際化に関して実践的な事例を申し上げますと、もちろんの学校でも外国人児童がいると思いますし、ともに学ぶということがあります。それと、学校によっては小学校でもALTがいるところもありますし、中学校には、JETの方からALTが配置されています。

また、日本人でありながら、アメリカの学校で学んでいる子どもが、日本の親元に帰ってきて、日本の学校へ体験入学している事例がある。

それと一つは、メキシコの日本人学校へ3年間勤務した先生が帰ってきて、これから国際化に向けて、いろいろと学んできたことを教えていくこともやっている。

もう一つは、地域にも外国の方が住んでおられる。その方との交流も進んでいる。

この4点の報告ですが、まだ他にもいろいろあろうかとは思いますが。その中でも、メキシコの日本人学校に勤務した先生が帰ってきて、これからの国際化に向けて、いわゆる共生、国際性豊かな子どもの力とは何かという視点からいろいろ実践した事例がある。そこで学ばせていただいたことは、いわゆる国際性とは「共生・共存の能力」を培っていくということで、細かく言いますと隣人との相互理解を促進する心情と態度、あるいは他者と自分との異質な面・同質な面をしっかりと認識して相互により良く生きていくための接点を見いだすこと、その認識したことを受け入れて、相手を尊重する気持ちを培う。また、自分自身が磨き高めることを通して、自分をより積極的に表現して、他者と関わっていこうとする意欲、こういった

ことが国際化に向けて、国際性すなわち共生・共存能力を培っていくことに繋がると思う。

それを磨いていく方策には、異質なものを積極的に受け入れる姿勢、それと日本人としてのアイデンティティの形成、これは何かといいますと、やはり、国際性豊かな子どもを育てるための指針としては、アイデンティティの未熟な面、それとコミュニケーション能力の弱さ、または異質な感覚に触れ合う機会が少ない、そういった面から取り組む必要があるのではないか。

その取り組みの一環として、国際性の資質や能力を培っていく具体的な実践として、小学校や中学校では、総合的な学習の時間がありますし、総合的な学習の時間と他の教科との関連性もあり、そこで実践したのは、総合的な学習の時間の中で、ふるさとに学ぶ「ふるさと学習」を通して人と人との出会い、また、豊かな自然との出会い、先程も指摘されましたが、日本文化を重視した文化財との出会い、これらの出会いを通して自分を高めていこうとする実践と、その発展的に、その教員はメキシコで勤務した経験がありますので、世界の各国々の中でのメキシコってどんな国であろう、中国ってどんな国であろうとか、そういった各国々のガイドブックを作ったり、こういった取り組みをしている。

基本的には、具体的な実践事例として、うちの学校には海外勤務した教員がおりまして、2年程前から取り組んでいる。

○ 分科会長 全体会で提示された4つの観点からの実践的な事例を踏まえながら、具体的にご報告いただきました。かなり具体的なイメージを列記していただいたと思います。

○ 委 員 私自身は10数年間海外の方と付き合う中で、海外の方は日本人に関わってくれようことを待っているような気がします。

外国の方は喋りたい、コミュニケーションを取りたいと心にはあるんですが、日本人は控え気味ですから、外国の方もコミュニケーションが取りにくい。ということは、日本人は精神的に国際化されていないということです。ですので、もちろんここでも言われている英語ではないということもありますが、先程もお話になりました、世界史を除く教育をしてきたことはもっての他で、世界史を学ぶことで国際化への道が開けるような気がします。

○ 分科会長 10数年海外の方とお付き合いする中で、どうも日本人の方が控えめでもう少しコミュニケーションを取っていかうとする精神性が大事ではないかということを指摘いただきましたが、特に、世界史をきちんと教えていないという実態を踏まえて、世界をきちんと知ることについても、私達の視点というのが少し問題になるのではないかという指摘でした。「精神的な国際化」という新しい言葉で言い表していただきました。

○ 委員 私も現地の中学校と高校で学んだわけですが、留学中に感じたことは、決して現地の人達は日本語を学んで私に話しかけてくれることはしていなかった。英語で私に分かりやすく、現地の言葉で話しかけてくれた。それがここ日本には欠けているかなと感じます。日本に受け入れている外国の方の言葉を話さずに、こちらの言葉を話して、コミュニケーションを取ろうとするというのも、言葉は出来るにこしたことはないと思うんですけども、それでは相手の方が折角日本に来られているのに、日本語の良さだとか、日本の文化を知る上で、言葉をすべてこちらで英語でやってしまっていると、本当の意味での国際化、国際交流ではないのではないかと感じる事が最近多いです。

また、ALTの先生もたくさん来ていらっしゃる中で、ALTの先生の生活面の対応をお願いしたいと町の教育委員会から言われておりまして、お世話をしているんですが、やはり今の時期、ALTの先生で8月の時期に就任された先生は、この11月、12月の時期はすごく寂しくなる時期なんです。クリスマスが自分の国で家族と一緒に迎えられないことも寂しかったり、少し寒くなってくるというのもあるんですが、この時期私がお世話をしている人達は、やはり少しホームシックになったり、11月の感謝祭の前に自分の家族と居られないということで、ちょっとネガティブな考え方をする方達も多いので、私も積極的に私の教えている生徒だけでも、一緒にハロウィンパーティーをしましょう、一緒に感謝祭の食事を取りましょうという形で、また、地域のお祭りがあればそこに一緒にいきましょうといった形で誘ったりはしているんですけども、やはり、学校で教えている中で自分の生徒達と近所で出会うことはあっても、それだけで終わってしまうので、もう少し仲良くしてあげるといえるのか、地域ぐるみで受け入れる体制があればいいのになと思うところがあります。

やはり、1年で帰ってしまう方が多いので、場所によっては2年3年といらっしゃる方もおられるんですが、1年でだいたい帰っていかれるのも、途中で寂しくなってしまったというのがあったり、溶け込めなかったりということで、仕事として、ALTとしての指導助手の仕事はこなしていても、精神面で支えてあげる人が周りにいればもう少し違うんじゃないかなと思ったりもします。

○ 分科会長 留学中のことを振り返って、また、現在の支援する立場から、日本人の言葉で話す、どんな言語を使うかではなくて、コミュニケーションしようとする気持ちみたいなのが大事ではないかという、根幹的なことをおっしゃっていただいたように思います。ですからそういう意味で、ALTが学校に行ってらっしゃっても、学校だけで対応するのではなく、地域での受け入れがないと中途半端ではないかというお考えですね。

- 委員 私は、子ども達の国際性を伸ばすための資質として、コミュニケーション能力、それは積極的に自己を表現しようとする姿勢、これが必要だと思います。ただ、これは英語ではなくてやはり母国語、全ての活動の基本になります国語力になりますが、国語力を適切に身につけて、正確に自分を表現したり、相手に伝え、理解してもらう。これが根幹になります。

今、言われているように、国語力の育成が、まず、自己表現の大きな一つの力になります。これが一番大事である。国際性を培う本当の基本は、いろんな人との出会いとか、あるいは自然との出会いとか、いろんな文化との出会い、こういった出会いを通じて、自己を表現しながら自分を高めていくということがもちろん大事である。そこに、国際化に向けて英語によるコミュニケーション能力の育成も言われておりますし、国においても英語の話せる日本人の育成といういろんな施策がありますけれども、その根幹は国語力の育成ということがもとになると言える。

- 分科会長 委員から、国語力の育成ということを、母国語で自分を表現出来る力を養うことはまず根幹ではないかということ、もちろん英語を話せる日本人を育成することも大事ではありますが、もっと根幹的に、人として出会いであるとか、文化であるとか、自然との出会いであるとか、とても重要であるという指摘をいただきました。

- 委員 相手に接近するために、こういった公の場だけでなく、私的な場でも言えることではありますが、最近の建物というか、外国人専用の宿舎であるとか、外国人専用ということを考えがちですが、以前は民間の洋風化された家、外国人が使いやすいような家を持っているところに、外国人を下宿させてもらったりしていたが、そういうことをして日本文化を知ってもらおうということも一つの方法であると考えます。

外国人を受け入れた以上は、丁寧に重宝に扱うのではなしに、日本ではこういう生活をしているということを体験してもらって、外国人から見た良い点、悪い点を日本人が学ぶべきこともたくさんあると、そういうことが国際化という視点から見ると子ども達に良い影響を与えるのではないかなと思う。

今、高島市内では、外国人は観光等で通過する程度で、滞在されることはあまりなく、直接会うことはあまりないが、以前勤めていた大学の関係で、院生が高島に来て見てみたいといって、外国の研究者を連れて来ることもあり、農家などの生活の現状に触れ合うことをすごく喜んでもらえる。教育においても、そういったことを、親が態度で見せることによって、子どもも国際化していくのではないかと感じます。

- 分科会長 今、委員から親の態度が大事ではないか、言葉だけ国際化というのではなく、親が手を拱いて通り過ぎていくというのでは駄目でしょう。また、

外国人だけの専用宿舎とかを設けるのではなく、洋風の家泊まっていただいて、畳の生活とかを紹介するというのも日本文化の理解に繋がる。そこでは自然体というのが大事ではないかと。何かこう肩に力を入れないでというふうに指摘いただきました。

○ 委 員 日本人といいますか、日本の学校教育の中で、周りと一緒にじゃないこと、自分の感じ方が違うこと、自分の意見が違うことが認められないような感じがあります。

それは私が中学生の時からあったのですが、何か他人と違うことが受け入れられないような風潮があり、違うことをしたら恥ずかしいかなという気持ちになってしまう。周りがいけないのか、恥ずかしいのいけないのかという問題もありますが、外国ですと、髪の毛の色も違ったり、瞳の色も違ったりしていて、当然のように集団生活に幼児が入った途端に、肌の色が違う、目の色が違うということがあるのです。

アメリカの州の統一テストを受ける場合には、私達の肌の色とかを書くところがある。私の場合は黄色人種でありますので、黄色人種のところで○を付けます。目の色には、ブラウンに○を付けますが、隣の人は肌の色がホワイトであったり、目の色はブルーであったり、グリーンであったり、それが別に普通で違っていいということが、日本ではあまりない。

例えば、英語の授業を私がしていても、少し発音のいい生徒が発音をするとクスッと笑ったりするんです。笑ったりするので、発音のいい子がちょっと構えて恥ずかしそうなふりをしてしまったり、次に回ってきた時に大きな声で答えが言えなかったり、また、その周りの環境もあるんでしょうけれども、日本語の発音に英語の発音がなっている。

恥ずかしいから日本語英語をみんなの前で言わなければいけないっていうようになってしまう時に、私が自分の子どもに対してもそうですし、私の生徒に対してもいつも言っているのが、「他人と違っていい。」ということなんです。他人と違っていいから、きちんと自分の意見を言うということを、恥ずかしがらずに言える大人になるように、そうならないと例えば、外国に留学したいという気持ちがあっても、きちんと自分の意見を言える日本人として受け入れられないよという話をするんです。

また、他人と違う感じ方をしても、他人と違う意見を持ってもいいということを、きちんと学校でも、英語の教育だけではなくて、認めてあげないと、それこそ今問題になっているいじめの問題を含めた「子どもの人権」を、きちんと周りで「違っていてもいい」ということを教えていくこと。また、違う人を笑わない、恥ずかしがらせないような、そういった教育も必要ではないか。

国際化に後々通ずる面を考えても、違っていてもいいということを教えていって欲しいと思う。

○ 分科会長 国際化という話の中で、「人権」という観点からも、もっと幅広く見られるということですね。このあたりが国際化というと英語が喋れてということではなく、英語だけではなく、違ったものを大事にする、人権教育だということを腹づもりしながら、関わっていただいているということでございます。

○ 委員 先にコミュニケーション能力の育成が大事であると言いましたが、単なるコミュニケーション能力の育成だけをやっているのではなしに、「人を差別してはいけませんよ」、「仲良くしなさいよ」、あるいは「人権を尊重します」という、単なる規範的な呼びかけに終わっていないかということで、外国人との共生の中には、基本的には自分との共生から始まって、他者との共生、環境との共生があると思う。

その中でややもすると、日本人と外国人との二項対立で捉えがちであるが、そこで異質とか同質とかという考え方も大事ですけれども、違いの中にその人の人間性とか、あるいはそれぞれの地域性といいますか、いろいろな文化などの背景があるということをしっかりと気付かせなくては、単なる日本人と外国人という枠だけで捉えられた形の国際理解になってしまう。いわゆる共存していく、共生していくことにはならない。

その人の人間性、その背景には、文化があることを理解していくことが大切である。概念的に捉えるだけではなく、他者との違いや同じこともしっかりと認識して、その接点、ともに生きていく接点を見いだしていく。その接点を見いだしていくことによって、それぞれの他者への尊厳とか人間性とかを尊重していく必要がある。

○ 分科会長 コミュニケーションスキル、それだけではなかなか難しい。その背景には人間に対する思いだとか、文化への思いだとかがないと、コミュニケーションが十分出来ないということはあると思います。

私達は、英語だとか中国語だとかそのあたりをよく見ますが、外国といえば例えばイスラエルであるとか、いろんなところがあると考えていきますと、文化ということは本当に難しいと思います。

今、頭に思い浮かぶのはいくつかの国々ですが、そういう意味では世界史といいますか、世界史には文化も入って参りますでしょうし、未履修の話は本当に胸の痛む問題であると思います。

○ 委員 先程も申し上げましたが、外国の日本人学校に勤めていた教員が戻ってきて教えておりますが、例えばメキシコってどんな国だろうかなとか子どもに投げかけたり、あるいは、小学1年生の児童が、アメリカの学校に行っていて、日本語は喋れないんですが、その児童が体験入学に夏休みに帰ってきました、2週間程この学校に体験入学しましたが、英語は喋れるけれども日本語は喋れない。その中で日本の子ども達とともに学びながら、

生活様式は違いますが、給食を一緒に食べたり、いろんな生活が違う中で、やはり生活文化というものが背景にあるんだなということを、子ども達が認識するのが大事ではないか。世界全ての国々の背景を調べるのではなく、やはり関心があるところを選びながら、問題提起しながら、そういった国際理解、共生を培っていくための取組が必要と考えております。

○ 分科会長 確かに全部やっていくというのは難しいですし、興味のあるところからしっかりと押さえるというふうに言っていただいて少しホッとしております。今、体験入学ということを言われて、国籍は日本人なんですかね、日本人であります、外国で暮らしていて、夏休みに親元に帰って体験入学をされる。そういうことによってまわりの生徒達への影響はどういったものかお聞きしてもよろしいでしょうか。

○ 委員 私どもの学校では小学校の段階からALTを配置しておりますので、簡単な英語に親しむ活動を通して、たまたまその児童がアメリカの学校に行っていますので、英語で話すことによって、ああ僕らの私らの英語も通じるんだなと、あるいは食育実践活動の中での日本食の給食等によるいろんな交流、まず交流を通して、相手とのいろんな対話により、背景があることを認識していく、そういった出会いが大事。

○ 分科会長 小学校からALTを配置されていますので、そこでまた英会話は出来るということで、様々な体験をお話いただきました。

○ 委員 多文化共生の視点と言うならば、日本に来ている外国人が喋ることに対して、逆に日本人が学ぼうとする心構えが必要であるとともに、外国の方が、日本のことに触れようとし、触れた時には、すごく、反応が良い。例えば10点満点で見た時に3点程度のものであっても、すごく応援するというか、「ああ、そうなんですか。」とか、「ああ、その通りだ。」とか反応を示す。そういうことは外国人にとっても、また、われわれにとっても、逆に考えれば感じるんですが、特に外国の方は表現方法がすごく大きくて、それが大切だなと思いました。

また、中国の方は正月にお餅をついても、丸め方でも日本の老人よりもうまく丸める若い中国の方もいる。そういうことを誉め、誉めてもらうことが、国際化に繋がっていくようにも思う。

○ 分科会長 日本人にとって痛い部分を突いていただいたと思う。私達はどうしても誉めることが非常に少ないですね。表現が控えめというところがあるので、外国の方からすると、自分のしていることを無視されたんじゃないかとか思ってしまう。やはり、英会話の中では「良く出来た」という誉める表現がたくさんあります。これは日本では、「うん」とか頷くだけで終わ

ってしまう。

実際に、外国の方と触れ合っておられる経験から、具体的な指摘をいただきましたが、そういう意味では、痛いところを突かれているという気がします。

国際化を考えていった時に、日本文化が持っている堅さという面もあります。みんなが一緒という規範と自分の意見は自分の意見として言うようにという指導との矛盾っていうのが出てきたんだろうと思います。

これからどういうふうに国際性を高めていけるのかを含めて実践例も話していただきましたが、私達がここで討議しますことは、国際性というか国際化というものをもう少し広い立場で見えていかないといけないということをお願いすることが一つあると思いますが、それも含めまして、まだ本音をお話しいただけたらありがたい。

- 委員 資料1の国際化への対応の議論の視点の3点目には、多文化共生の視点が挙げられているが、これが今までお話ししてきた中で何点か出てきたと思いますが、学校教育を考えていく時に、今いじめの問題等で尊い命が失われているが、そういうことを踏まえますと、自己を肯定的に捉えて、自分を否定的に捉えるのではなしに、自分を肯定的に捉える肯定感、それに加えて自尊感情ですね、これらの育成が非常に大事であろうと考えます。

それはやはり、多様な学びの中で自分を知ることから始まり、自分と他者との関わりを学習していくという在り方、もう一つは、自分なりにこれはおかしいぞという、批判的という意味ではないが、合理的・非合理的なものを見抜く力という、これらを子ども達にしっかり植え付けていくことが必要ではないかと考えています。

例えば、今、人権教育が盛んに言われておりますが、人権教育でも、これはおかしいぞといった不合理を見抜いていく態度や他者への共感性というんでしょうか、そういったものを育てていくことが大切です。

冒頭申し上げましたとおり、一つの事例として、ふるさと教育というもので、ふるさとの良さや文化、そういうものを知る。あるいは、いろんな人との出会いをしていく。やはり学校教育においては、各教科等と関係させ、系統的な学びとして捉えていくことが必要でしょう。

最終的に、共生を目指した教育は、現実の地域の中で、あるいは学校の中で、直接に体験すること、出会いを大事にして交流していくことなど、実践的な態度を育てていくことが非常に大事であると思います。

- 分科会長 今、自己肯定感と言われましたが、コミュニケーションをしようと思うと、自分というものをある程度肯定的に捉えられないと、発信する力といえますかそういった力が湧いてこない。やはり、こういった意見を持っているけど言ったら笑われたらいけないとか思いますよね。

自分と他者とのコミュニケーションといった時に、自分も認めて、相手

も認めるといった両方の立場がないと、相手にだけ素晴らしい素晴らしいと言っているだけで、発信する力がないと駄目ですし、個と個もそうですし、文化ということを考えても、ふるさとの文化の素晴らしいというところを認めていかないと、相手の文化も認めていくということはとても難しいだろうと思う。まねだけになってしまい、それを本当に自分のものとして受け止めることにはなりにくいと思う。

そういう意味では、今、言われました相互感情を持つといいますか、自分が生きている地域についてもしっかりとしたいものであるという認識がないと、家に外国から人をお呼びをすとか、自然の交流、コミュニケーションといった場合に、生きたコミュニケーションになりにくいのではないかと、委員のお話を聞いて思いました。

- 委員 下駄履きの文化などと言って、常に玄関から一つ跨いで中に入れるようなオープンスペース的な心の持ちようが必要であると思うんです。外国人を迎え入れる時も、特別にこちらに座れとか、テーブルに向かえとかじゃなくて、我々が普段しているように招くことが何より大切であるとともに、先方もそれを望んでいるような気がします。

そういうことであれば、単に、家庭、地域、学校だけでなく、親自身からそういう姿勢を見せることによって、成り立たせていくような教育が必要であると思います。どう喜んでもらうか、半分しか喜んでもらえないか分かりませんが、その喜んでもらえたところを、次に招く時に機嫌良く入れていく方法を考えれば、理解し、コミュニケーションもうまくいくと思いました。

- 分科会長 こちらがいいと思っていることは、必ずしも相手の方にはいいということではなくて、普段のものを、下駄履きであつたら、下駄履きも含めて、全部オープンにお見せする方が向こうの方も喜ばれるのではないかと。しつらえた様子だけしか見たらいけないとかではなくて、押入の向こうには何があるのかすごい興味をお持ちですよね。そこだけしか行けないというと、向こうには何か悪いものを隠してあるのかと、そういうのではなくて、何でも見ていただこうと、見ていただくことにおいては、どれを見ていただいても何も恥ずかしいことではないのだという姿勢が重要ではないでしょうか。

- 委員 逆にそこを見たいという、それらを見てもらうことで、外国の方々にとっても大いに勉強になり、その批判をまた次の機会にも活かしていくと、より国際化が進むと思います。

- 分科会長 私の体験でいいますと、海外の高校生に何人か我が家に泊まっていたいたことがあるが、その時に大きな衝撃を受けましたのは、家の手伝いと

いいですか、ホームステイの子どもは来た初日からピタリと私の横について、料理を手伝う。これは親にも言われているし、ホームステイで泊めていただく以上はしないといけないことだというわけです。

私の家の文化では、私が作る人というイメージでおりましたから、来ていただいた時にはみんなが手伝ってくれましたが、そういう生活者意識というのが、やはり私達日本の文化においては、子どもは勉強する人、生活を支える人は親というふうになっているが、生活を支えるというあたりにすごいエネルギーがあるなと感じました。「手伝う」という子どもの意識ではなくて、それをやらないと「生活が立ち行かない」ということがあるんじゃないかと。日本の文化の余裕というものもあるんでしょうけれども、自分の部屋に籠もるということが許されないような感覚があるんじゃないかと思うんですが。

○ 委員 私がホームステイしていた時は、学校が終われば、宿題の後に手伝いをしなければ夕食が食べられないのでそれをしたり、アメリカの小学生・中学生・高校生は学校が終わった後に友達の家に行って遊ぶということがなかなかないので、学校が終わって、ある程度の成績の生徒は放課後に部活動を許されていたんですが、それ以外はスクールバスに乗って家に帰ったら、家のことを手伝うので、家の手伝いと宿題が終われば、1日が終わるので、あまりだらだらとお友達の家に行って、遊ぶということはしなかった。それも自転車で行けるような距離ではないということもあるかもしれないですけども、自分が決められた家の仕事を済まさないで、当然、食事出来なければ、日本であつたら座っていてもお父さんやお母さんがしてくれるようなこともしてもらえないので、あとお仕置きで部屋に戻りなさいということはありませんでしたが、あとはみんなで居間に集うという形をとる家庭が普通だったので、一人で部屋にいるというのは宿題をする時くらいでした。あとは家族の部屋で団欒をする形で過ごしていたので、日本の学生と学校の終わった後の放課後の過ごし方は、少し違うのかなと思ったりする。最初の頃、宿題で部屋に籠もってたりすると、ホームシックじゃないかなと心配されたりして、それから宿題をする時もドアを開けて宿題をしたり、家族が食事を食べるテーブルで宿題をするようにしました。

○ 分科会長 そうしますと、親子のコミュニケーションの取り方や量が全然違う。私達が言っているコミュニケーションというのは、いろいろの形があると、スキンシップというものもあるでしょうし、キスするとかハグするとかもあるでしょうし、言語的なコミュニケーション能力と非言語的なコミュニケーション能力が、今後は両方ともないと駄目で、これからまず課題かなという気がします。

そういう意味では、日本の子どもが家に帰って、パソコンをしたり、テ

レビ・ビデオを見て部屋に籠もってじーっとしているというスタイルというのはどうかと少し考えさせられてしまう。絶対量というものをフランクに出来るようにするというのも、バランスを考えると、必要なのかなと感じます。

- 委員 ここは、国際化への対応という理念の分科会ですので、その中で多文化の共生にこだわるんですが、共生と言うことは、ともに生きることですので、ここには外国人との共生もさることながら、子ども達の身近な生活の中で、家族におけるところの老若、異年齢、男女とか、地域でも障害のある方ない方、そういった人達との共生、いろんな共生があるわけで、ここでは国際化への対応ということで外国人ということになりますが、そういういろんな人との共生が土台にないことにはいけませんので、そのあたりも視野に入れながら、その人その人の人間性を如何に共感的に理解して、尊重しあっていくかということが大事だと思う。

 これからの教育で、国際化への対応の中で一番大事なことは、それはいろんな面も含めて、「共に学び共に生きる教育の創造」であると思う。

 そのためには、今までお話ししてきた中で、いろんな視点もありましょうし、そのあたりが視点の大きな目標にならないのかなと思います。

 先程も出ていましたが、コミュニケーション能力や言語活動だけでなく、実践力とか実践的な行動力も含めた自己表現能力、そういった視点が大事だと思います。

- 分科会長 共生というところを見てみますと、いろんな方との共生が土台にないと外国の方との共生は無理であるというお話でしたが、共感性を如何に高めていくかということになりますと、他の良識の再構築だとかの分科会に相通じるものがあると思いますが、共生というキーワードに関して、もう少し国際化というかそのあたりも含めて意見をいただければと思いますが。

- 委員 共生は、日本人も望んでいるし、外国の方も望んでいると思いますので、男女、老若、高齢者、障害者を含め、助け合いの精神を培うことが大切だと思う。それを学校で低学年の時から僅かずつでも学ばせていくことが大切で、突然社会人になってからああしろこうしろではなく、学校生活の中でも、往復の通学の中でも、共生はどこでも通ずることだと思いますが、一番残念に思うのは、学校の職員室がテレビ放映されるのを見た時に、個人個人が一生懸命仕事をしているだけで、先生同士のコミュニケーションがあまりなく、そういったことがテレビの画像を通しても見受けられるので、教える側からの共生・コミュニケーションが一番大切だと思う。そういうことを子どもが見ることによって、良い方向に、先生がしているからああいうふうになければと、気付かせるような態度を作れたらと思います。あくまでも教える側の共生が、学ぶ側にも伝わる共生になるように出

来たらと思う。

- 分科会長 教える側のコミュニケーションの不足は、教員の多忙も原因と思いますが、隣の先生が苦しんでいるのをどのように察知して、対応するのなかなか難しいけれども、心痛むところです。

- 委員 全く違う観点ですが、私の住んでいる地域ではブラジルの方と中国の方が多く住んでいますが、私は学童保育の英語活動を小学校でしていますが、そこではブラジルの子どもも日本人の子どももいまして、英語活動を小学校の教科の中でもALTの先生にやってもらっていて、その英語活動に力を入れているのに、ブラジルの子ども達が日本に適応出来ないことをほったらかしになっている部分もあったりして、身近なところからの国際交流を考えた時に、英語活動をするとか、英語圏の文化をという前に、自分の身近なところにいる外国の方のサポートの面でもう少し協力出来るような体制を、例えば子ども達にもっと外国から転校してきた子ども達を受け入れるような教育だとか、まわりの先生達ももう少し中国やブラジルの子ども達を受け入れる体制を作って欲しいと思う。

交換留学生が身近にいない学校の場合、学校の中にいる子ども達のサポートというかそういったものを強化してってもらわないと、外国人の子どもが孤立していつてしまったり、勉強が分からなくて遅れてしまったり、最終的に学校に来なくなってしまうても、義務教育ですが日本人でないので、学校に来なさいよということを教育委員会も言えないみたいで、それで来なくなったり、いじめられたりとか、そんなことをよく耳にするので、もっと身近なところで国際交流をして欲しいと思うんですが。

- 分科会長 理念的には共生とか共感ということが大事なんですけれども、具体的に今、ブラジルとか中国とかの外国籍の子ども達のサポートが少しまだまだではないかということで、受け入れ体制がもう少しあっても良いんじゃないかということが、提言として言えるんじゃないかと思います。

- 委員 本町にも中国やモンゴルから来た児童がいますが、日本語は喋れないし、もちろん生活様式も食事も全然違います。学校の対応が大変です。特に、同じ中国でも住んでいる地域によって言語が違いますので、通訳出来る人がおらず確保が難しい。そういう外国人の対応も非常に相手の立場になって、教師側が体制を整えることが必要で、それを通じて、子ども達への対応をしていくことが必要である。

- 分科会長 確かに生活様式は随分違いますので、サポート体制をきっちりしていただく、身近な外国の方と低学年から一緒に暮らすということが出来る時代になりましたので、その機会をうまく生かす、お互い良い印象を持って帰

っていただくというか、それが一つの外交といいますか、草の根外交と言いますか、将来、日本に行って良かったと思ってくださると、トラブルが起こることはなくなるんじゃないかと思います。

また、もう一つ思いますのは、ブラジルや中国の人が来られたら、最低、挨拶程度の言葉はまわりの人達が学べたら良いんじゃないかと思います。委員が言われたように、こちらの文化で対応すると同時に、お互いに学びあうとか、向こうが先生になって教えてもらうとか、そういった意味で対等に学びあう、自尊感情をそれぞれ持った形で、コミュニケーションは対等でないと出来ないのも、こっちがこうだと一方的に言うだけでは説諭だけの話になってしまいます。

国際化への対応と言うことで話し合っていましたでしたが、最後のまとめとして、一言ずつ感想といいますか、まとめといいますか、委員の皆様からお言葉をいただけますでしょうか。

○ 委 員 学校教育においては、多様な背景を持った子ども達が共に学び共に生きる教育環境を如何に創り出していくかということだと思う。特に、国際化に向け、多様な文化が背景にあるということと、それぞれ一人ひとりの人間性を尊重する、その辺が求められることになろうと思います。これはすべての教育に通ずることです。

○ 委 員 受け入れだけでなく、ともに学んでいくという心構えが必要だと思う。外国の文化とか言語とかも尊重することは必要である反面、一般的に日本ではこういうふう外国人と接するのであるというような根本的なことを教育の中で取り入れられるならと思います。

○ 委 員 お互いに違いを認め合うこと、先程委員がおっしゃった人間性を尊重するという、それに通ずる「違いを認めること」が国際化に対応出来る人間にしていくための一つだと思います。

あともう一つ、親が何も働きかけていないのに、子どもだけが国際的というのは無理な話で、私の子ども達はおやすみと声をかける時に、私達親やお祖父ちゃんお祖母ちゃんに声をかける時は「おやすみなさい」といって部屋に行くんですが、私の友人やALTが私の家にいる時は、寝に行く時にはおやすみなさいと言う前に、ALTに教えられたのかどうか分かりませんが、首元に抱きついて、キスをして寝る。別に、誰か説明した訳ではないですけども、多分お別れの挨拶だとか、そういった時に、その人達が普段しているのを見てだと思ふんですが、それでおやすみと言いながら行くのを見ると、環境もすごく大事だなと思うところもあって、たくさん滋賀県の中でも英語活動をされていて、外国の先生達がいろんな国から来ていただいているので、そういった中で、英語の発音だけでなく、習慣だとか文化だとかいろんな面で子ども達が吸収していければいいと思

います。もっと活発に英語活動をやっていただくと子ども達のプラスになるのではないかと思います。

○ 分科会長 ありがとうございました。

第3回滋賀の教育協議会議事録（全体会②）

1 開催日時・場所

平成18年11月13日（月）午後3時40分～午後4時00分

滋賀県庁本館2階 滋賀県議会第3委員会室（大津市京町四丁目1番1号）

2 出席委員（五十音順、敬称略）

板倉安正委員、尾賀康裕委員、奥田祐子委員、片岡昌史委員、栗林茂委員、小巻おさみ委員、清水慶子委員、住岡英毅委員（会長）、千原美重子委員（副会長）、中居和平委員、西村勝晴委員、眞壁清治委員、山田昇委員、山本重夫委員、山本真理子委員

3 会議の概要

○ 会長 各分科会の内容を共有してみたいと思います。最終的には、事務局の方でしっかり記録して、それをお送りして共有していきますので、今はメモしたりしないで、しっかり聞いていただくことにしたい。その共有作業というのは記録をもとにしていきますが、第4回の議論が終わってから話し合いの中で共有していくことにしますので、しっかり聞いていただきたい。では、キャリア教育の推進からお願いします。

○ 分科会長 キャリア教育の推進では、各委員から自由に発言していただいて、それぞれに非常にポイントをついた視点を与えていただきました。

基本は当たり前のことになるのかもしれませんが、生きることは働くことであるし、働くことは生きることであるという原点、基本的なことを子どもの中にどういうふうに育てていくか、言葉で言えば「キャリア形成」になると思います。こう育ちなさいというのではなくて、子どもが自ら育っていくということですから、キャリア形成の支援をするというのが、キャリア教育のポイントになる。その一つとして、子ども達に体験をさせるということが大事で、一つは中学2年生の5日間の職場体験というのがあります。もちろん基本は地域と企業と家庭と学校がどのように「繋がり」を持つかというところから始まっている。既に始まっているが、まだまだその深まりというか、連携の深まりというのが十分でないので、その深まりというのをどうしていくのというのが課題になってくるであろうと思います。

次は、その体験を小学校は小学校なりに取り組んでいるが、子どもがどう発達していくかということに併せて、その体験をどう受け止めていくか、子どもの発達の視点というものを欠かすことは出来ない。そう考えると、よく言われることですが、小中高連携あるいは幼稚園から始めて幼小中高連携、中高大まで含めた連携というものが大切になる。これは言葉で言わ

れるけれども実際にはあまりない。だから、委員からの発想ですが、例えば滋賀県の子ども達が全員、キャリア教育カルテみたいなのを持って、そこに自分の体験を蓄積をしていく考え方があっていいのではないか。これは、子どもの発達に応じてどういうふうにそれを蓄積していくかということと、それを学校にフィードバックしていく時には、幼小中高大の連携をどう深めるかという時に大切になってくる。

体験と同時に、今のところは、例えば小学5年生ではうみの子に全員乗りますし、中学2年生では5日間の職場体験をしますが、学年を超えた集団の活動というものが無いので、これも大事なのではないか。現状からいくと、教育委員会なりが、主導権を持って仕掛けていかないと動かないだろうという意見があり、仕掛けというものをどうしていくかということになると思います。

もっと大事なことは、そういう中で育っていく子どもの視点から、キャリア教育がどう受け止められていくのかを十分考えていかないといけない。そうすることによって子どもが明るさを持つとか、夢を持つとか、楽しさを感じるとか、そういうものでないと長続きしない、根付いていかないと、そういう話が出ておりました。

このようなことをまた全体会の中で練っていただいて、滋賀県の一つの特色あるキャリア教育として展開出来れば、ありがたいというのがまとめです。

- 分科会長 良識の再構築ですが、全体会の中でも申し上げましたが、一番大きなレベルの話と、ものすごく具体的な話と、その中間の話があると申し上げましたが、仮に、これをA・B・Cというふうに置きますと、Aのところではどういう話をやり直したかといいますと、良識の再構築といっているいろいろな視点が書いてありますが、要は社会の中に生きる個人、社会的な個人といえますか、社会というものがきちんと意識された個人の在り方、行動、生き方、こういうふうに押さえることが出来る。そのことが、再構築という限りは、今それはもう崩れていて駄目なのかどうか、それは何に基づいてそう言っているのかという話をしておきまして、そんなに大幅に崩れているとかではないが、社会的な規範あるいは宗教も含めて言えば、宗教的情操というものはあるところでは非常に弱くなって現れていることは事実だし、多くはそうではないにしても、程度の問題であって、かなり弱くなっているという認識に立たざるを得ないということを確認いたしました。

これは、Aの領域に関わって、社会の中の個人、こういうものの押さえをしました。

では、どういうことを考えていくかという時に、中間のBの話をしますと、大きく2つあったが、一つは教える側、例えば学校、家庭などであるが、あるいは地域なり地域の大人、こういう教育に当たる側が毅然たる姿勢を今失っている。分かりやすい例を言いますと、自分の反省点でもあり

ますが、大学の中でエレベーターから降りかけたら、わぁと乗ってきて、私が降りられなくなって、変なところで降りることになる。あるいはドアを開けたら、降りる人がいて、前に出て出してあげたら、今度は乗る人がどンドンどンドン入ってきて私の入る隙間がなくなってしまうということが平気で起きている。それを見ていた人から、「先生、ああいう場合はピシッと教育しなくちゃ、その時に現場でやらなきゃ駄目なんですよ。」そういうふうに言われたことがありまして、今、大人の社会にそういうことが蔓延しているんです。きちんと教育が出来ていない。だから、家庭でも学校でも、教育は、しっかり教えるということ、学ぶということの両面から成り立っている。教えるということについての規範の柱というか、意識というか、規範の文化というか、これをきちんと築かないと、子どもが良くなるはずはない。

もう一つは、子どもの規範意識を育てたり、情操を育てたり、他人のことを慮ったりするようなことは、実はいろんなこれまで根付いてきている地域の伝統的な文化だとか、人との関わりだとか、あるいは学校でいうと学校の集団生活の中での文化あるいは掃除をすとかそういうところに根付いている。学校の文化というものを、規範という面から考えた文化ですが、そういうものをきっちりと伝えるというふうな話が出まして、しかしこの2つのことは、学校だけで成せるようなものではなくて、本格的にやろうと思ったら家庭と地域全体と一緒にになりながらつくらなければいけない。どちらも地域の中の学校を規範という面からきっちりつくるという話がたくさん出ました。

それから、具体的なレベルの話では、子どもの社会参加をもっと促すような活動、子どもの出番がある活動をもっと学校や地域が作っていくとか、保幼小中の一貫教育が非常に熱心に行われているけれども、それはカリキュラム・学習内容の一貫のことではあるけれども、この良識・規範において一貫しているかということはやっていない、この連携をやるべきだとか、学校の教育目標はいろいろあるけれども、「元気になる」とか「逞しく」とか「学ぶ子」とかあるけど、それはそれでいいけれどももっと規範に沿った目標を持てたらいいとか、市レベルの話で、今、保護司がおられて中高のかなり大きく成長した段階で出てくるが、これをもっと幼小のところでいろいろやってもらえたらきちんと育っていくのではないかと、A・B・Cの話混ぜながらこういう話をしました。

- 分科会長 国際化への対応ということで、話し合いの中で、基本になりましたのは、滋賀県は非常に国際化が進んでいるということを感じました。それはやはり学校の中で日本人学校に行っておられた先生がおられたり、外国の方が身近におられるということで、うまく国際化への対応をしているところは外国の方を通して皆が学びあっているという報告がございました。

実践的な話としては、国際性とは何だろうかということで、共生共存能

力だとか、隣人の方との相互理解する力だとか、異質なものに対する理解力だとか、相手を尊重するとか、自分を磨いて表現する意欲を出していくとか、日本人としてのアイデンティティーを持つとかが出来て、国際化イコール英語というような形では全く論議が進みませんで、人権であるとか、同じ人間としてどう響きあっていくのか、共感しあうのかということがとても大事じゃないか。ですから、国際化というか国際性と言う前に、障害のある人となない人がともに生きるだとか、男性・女性がともに生きるだとか、高齢者・若い方がともに生きるだとか、様々なものに対する感受性を持って、磨くということが肝要との意見が出されました。

やはり、問題はコミュニケーション能力をどう磨いていくのかということで、人と人がどう繋がっていくかと言う時に、それは言語的なものではなくて、精神性の国際化、言語以前の問題でどう相手を理解していくのかという、相手への理解の視点から話が出ました。

もう一つは、自分自身が自尊感情と言いますか、自分を大切にしているという立場からでないと、それはコミュニケーションとしては成り立たないのではないかというお話が出てきました。

具体的な例としましては、現在、外国の方がいらっしゃいますが、必ずしもサポート体制が十分ではないと意見が出まして、サポート体制をこれからどうやっていくのかというのがこれから考えていくべきではないだろうかということで、委員の発言で国際化ということを一言で「ともに学びともに生きる」教育環境を如何に作っていくかということになるということで、学校教育だけでなく、親であるとか地域であるとか、生きている土台のところで学びあうということも大事ではないかということでした。

そういう意味で身近な「生きる」という視点から国際化ということを考えていくということがメインでありました。

○ 会 長 ありがとうございます。お聞きいただきましたとおりでありますけれども、詳細は先程申しましたとおり会議録をお送りいたしますので、またお気づきの点がありましたらなんなりとおっしゃってください。同時に、全体で議論していく機会がありますので、そこでさらに議論を詰めたいと思います。

そこで次回ですけれども、分科会の構成を決めまして、後日、事務局から構成案をお送りしたいと思います。それで、もしご希望がありましたら、その時点で結構ですので、事務局におっしゃっていただければ良いと思います。時間が来ましたので事務局にお返しします。

●事務局より、次回の日程を平成19年1月22日（月）とすることを諮ったところ、異議なく了承された。